

# 宮古島の牧と沖縄北部のマキ（続）

## —まきよ（マキ）と牧—

長濱 幸男(宮古島市史編さん委員)

### 目次

#### はじめに

- 1 節 『おもろさうし』の「まきよ」
  - 1-1 おもろの「まきよ」の用例
  - 1-2 おもろの「まきよ」注釈
  - 1-3 研究者の「マキヨ」解説
  - 1-4 おもろの「まきよ」の場所
  - 1-5 「まきよ」の呼称された時期
- 2 節 貢馬と牧
  - 2-1 明国への貢馬の動向
  - 2-2 貢馬からみた牧
    - ①尚真王の貢馬
    - ②尚巴志王の貢馬 ③三山時代の貢馬
  - 2-3 983頭の購入馬の謎
  - 2-4 三山時代の倭寇と進貢馬
- 3 節 マク（マキヨ）部落の祭祀
  - 3-1 国頭村比地・小玉森の祭祀
  - 3-2 比地ウンジャミの見聞記

- 3-3 比地ウンジャミの学術調査
  - ①比地ウンジャミの全体像
  - ②ウンジャミの猪狩り儀礼
  - ③猪狩りの神歌
- 3-4 昔の猪狩りの復元
- 3-5 江戸時代の牧の事例
  - ①将軍の猪鹿狩りの事例
  - ②千葉県小金牧のシシ落とし
  - ③千葉県嶺岡牧の馬捕り事例
  - ④馬捕り場の地形、⑤馬捕り場の区画
- 3-6 小玉森の堀切と馬捕り場の比較
  - ①小玉森の堀切
  - ②馬捕り場の比較
  - ③小玉森の堀切と馬捕り場の共通性
- 3-7 沖縄北部の牧の崩壊
- 要 約

#### はじめに

『宮古島市総合博物館紀要』（第23号2019年）に、拙稿「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」を投稿した。その中で、宮古島の「久場嘉城跡」、「てまか城跡」は「グスク」と呼ばれているが、これらは、もともとは馬城<sup>まき</sup>のことで、牧場の跡だと考えられると述べた。また、沖縄で呼ばれている「マキヨ」や「マク」は、「古い集落」と解釈されているが、しかし、単なる集落ではなく、もともとは「牧（マキ）」があり、牧がなくなった後、その牧を管理していた一門の住んでいた古い部落に付けられた名前であると述べた。

そして、国頭村比地の「まつがまマク」と呼ばれている小玉森は、牧の名残を意味する集落ではないかと仮説をたて、その検証のために種子島の牧跡（沖ヶ浜田塩屋牧）と牧を共有

していた一門や集落名を調査した。その結果、牧の名残としてマキ名が一門やその集落名につけられ、現在も使用されていることを確認した。

種子島の牧の調査から、馬牧の8つの構成要素、すなわち①牧場の区切りと規模、②エサ場、③水飲み場、④畜舎代わり（立場）、⑤牧夫の住まい（血族部落）、⑥馬追い場・捕獲場、⑦牧の神と依り木、⑧牧の名残としての「〇〇マキ」名があると報告した。

上記の「馬牧を構成する8つの要素」が、「小玉森・まつがまマク」にあるかを調べ上げ、牧だった可能性が高いと述べた。

本稿は「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」の続編である。本稿では、「牧」（マキョ・マク・マキは同義）について、3つの側面から考えてみた。1つ目は、『おもろさうし』の中の「まきよ」（まきよも同義）の意味についてである。『おもろさうし』で謡われている「まきよ」の用例と、先達の「マキョ」についての解釈について取り上げてみた。2つ目は、琉球から明国への貢馬の動向から「牧」がいつ頃つくられたのか。「牧」（マキョ・マキは同義）という呼称が、いつごろから使われたのか検討してみた。3つ目は、国頭村のマク（マキョ・マキ同義）と呼ばれている古い部落の祭祀に、牧の姿が残されていないか、検討してみた。国頭村比地は「まつがまマク」という古い部落である。ここは小玉森とも呼ばれ、ウンジャミが行われている。この祭祀の狩猟の儀礼から、牧との係わりの有無を調べてみた。

以上のように本稿では、『おもろさうし』の「まきよ」と「琉球から明国への貢馬の動向」、そして「まつがまマクの祭祀」から、牧の姿が見いだせないかを考えてみた。こうした牧の探索は、宮古馬や琉球馬のルーツ探しでもある。

## 1 節 『おもろさうし』の「まきよ」

### 1-1 おもろの「まきよ」の用例

「まきよ・まきよ」という言葉について、伊波普猷（1940）は「血縁と血縁部落」と定義づけており、仲松弥秀（1975）は「血縁的地縁集団とその部落」と定義づけている。稲村賢敷（1968）は、「血縁集団の古代部落」と述べている。一方、大林太良（1995）、吉成直樹（2015）、大山彦一（1952）は「マキは牧であり、牧を共有していた血縁、地縁集団とその集落」という考えでは一致している。これら先学の論説について、「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」（長濱2019）で取り上げた。

ここでは、法政大学の福寛美氏のご指導を頂きながら、『おもろさうし』の中に謡われた「まきよ」が、牧と関わりはないのか調べてみた。おもろの用例は、福氏のご教示による。

おもろの中の「まきよ」の用例は、次の7例である。

巻3--9 9、 (まきよまきよの のろのろ)

巻1 2--7 0 4 (二例、あらくすくまきよ・けとのよらまきよ )

巻1 3--8 1 8 («まきよ」・「いじけまきよ」の二例)

巻2 0--1 3 6 6 (まきよのかず)

巻2 1--1 3 9 4 (二例)

巻2 1--1 4 0 4 (1 4 4 1と重複のオモロ あらかきのまきよ)

巻2 1--1 4 4 1 (1 4 0 4との重複おもろ あらさきのまきよ)

巻2 1--1 4 4 1 (あらさきのまきよ)のみ、おもろを引用してみた。本文は岩波文庫版『おもろさうし』(外間守善校注)による。大意は福寛美氏による。

巻2 1--1 4 4 1 (あらさきのまきよ)

一聞<sup>きこ</sup>ゑ<sup>せ</sup>精の君が 思いの御肝<sup>おぎも</sup> 通<sup>と</sup>ち<sup>よ</sup>ゑ<sup>せ</sup> みおやせ 又鳴響<sup>と</sup>む<sup>よ</sup>精の君や 思いの御肝<sup>おぎも</sup>  
又真<sup>ま</sup>東<sup>こ</sup>風<sup>ら</sup>風<sup>か</sup> 吹<sup>か</sup>げ<sup>ず</sup>ば 思いの御肝<sup>おぎも</sup> 又追<sup>お</sup>手<sup>み</sup>風<sup>ち</sup>吹<sup>か</sup>げ<sup>ず</sup>ば 思いの御肝<sup>おぎも</sup>  
又新<sup>あ</sup>崎<sup>ら</sup>のまきよに 思いの御肝<sup>おぎも</sup> (以下混入部分続く)

(大意 名高く鳴り轟く精の君神女が、東風 追手風吹いたら、新崎(久米島具志川村兼城の古名)の集落に、思いの御心を通して奉れ)。

「まきよ」の同義語は、「ふた」「こだ」であり(『沖縄古語大辞典』)、k音は、h音に変化する。辞典には、「こだ」、「くだ」が「ふだ」という音変化をたどる、と述べている。これは「まきよ・まきよ」と言う言葉が、幅広い意味を含んで変化したからであろうか。辞典には奄美諸島から沖縄諸島にかけて「くだ」、「ふた」が分布している、と記されている。『おもろさうし』の「ふた」の用例は、次のとおりである。

おもろの「ふた」の用例

巻1 2-7 0 4 (あらくすくふた・やわれよらふた)「まきよ」と対になる

巻1 3-8 1 8 (ふた・いじけふた)「まきよ」と対になる

巻2 1-1 3 9 4 (ふた)「まきよ」と対になる

巻1 0-5 4 0 (二例 あまみやふた・しねりやふた)(おもろの大意は福寛美氏)

一平良こしらへや 降れ直せ 神々 又杜のこしらいや 又今日の良かる日に  
又今日のきやかる日に 又我謝杜に 降れわちへ 又根立て杜に 降れわちへ  
又百人 引ちへ 降れわちへ 又七十人 引ちへ 降れわちへ  
又あまみやふた 降れわちへ 又しねりやふた 降れわちへ

(大意 (首里の)平良杜のこしらへ神女は、今日の良かる日、かかる日に、(中頭郡

西原町) 我謝杜に、昔から由緒ある杜に、大勢引き連れて、あまみやふた・しねりやふた(神話的古代からの集落)に降臨し給いて)

## 1-2 おもろの「まきよ」注釈

『沖縄古語大辞典』角川書店(1995)で「まきよ」(まきよ)という言葉を引きいてみた。血縁集団による古代集落。古代の血縁団体で、同時にその居住する集落の名であった。本土語の「まき」とほぼ同義。おもろ原注に「牧也」(21巻1441)とある。上に地名を冠し「あらぐすくまきよ」「あらかきのまきよ」などとよんだらしい。のちに集落の離合、集散があり、集落は地縁団体が変わる。これらの集落は「うら」(浦)、「しま」(島)、「さと」(里)とよばれるが、「まきよ」の面影は各種の神事に投影されて残存する。集落が「村」とよばれたのは1609年の島津支配以後である。

次に、おもろの(21巻1441)の「まきよ」という言葉に対する原注を開いてみた。

おもろの原本に最初から付けてあった注釈である。『定本 おもろさうし』(外間守善・波照間永吉 2002)21巻1441から「まきよ」の部分だけを抜粋した。

21巻1441 「 又 あらさきの、 <u>まきよ</u> に、 おもいの、おぎも、 いみやど、世わ、まさる」	原注、 <u>まきよ</u> は「牧也」
---	----------------------

つまり、おもろの(21巻1441)「あらさきの、まきよ」は「あらさきの牧」と解釈しなさいという意味である。21巻1441の「おもろ」編纂者は、「あらさきの血縁集団による古代部落」とは考えていなかったのである。

次は、『校本おもろさうし』(仲原善忠・外間守善 1965)の抜粋である。

21巻1441 「 又 あらさきの、 <u>まきよ</u> に、 おもいの、おきも、 いみやと、世わ、まさる」	原注 ( <u>まきよ</u> ) は「牧也」とある 血縁及び血縁部落をいう。 (仲原・外間が注釈を追加)
---	---

21巻1441の編纂者は、「まきよ」の注釈を「牧也」としているが、仲原・外間は「血縁及び血縁部落をいう」と注釈を追加している。

「まきよ」の解釈について、18世紀の『おもろさうし』の編纂者と、現代のおもろ研究者の間に「相違」が出たのはなぜだろうか。それを検討するため、おもろ原注に「牧也」がいつの時期に付けられたかを調べてみた。

外間・波照間(2002)によれば、「『おもろさうし』は1531年に第1回結集事業が行われ、

41 首を収録した第 1 巻の『おもしろさうし』が成立した。1613 年に第二回目の結集があつて、46 首の第 2 巻が成り、1623 年に第 3 巻～第 2 2 巻が出来上がり、総数 1554 首が収録された」。

『おもしろさうし』の原本は、1709 年の首里城の火災で焼失し、その年のうちに具志川家に伝わる『おもしろさうし』（具志川本）が王府に献上され、翌年王府はこれを基に書き改め（謄写）を行い、2 部の『おもしろさうし』を作り、1 部は首里城内に保管され、もう 1 部はおもろの主取である安仁屋家に保管された。安仁屋家本は、同じ時に謄写された尚家本と異なり、本文中に朱で「言葉聞書」といわれる注が書き入れられており、「区切り点」が付されている（外間・波照間 2002）。

つまり、『おもしろさうし』で「言葉聞書」（注書き・原注）がつけられたのは、安仁屋家本であり、その年代は 1710 年ということになる。蔡温の「山奉行所規模帳」で、<sup>そまやま</sup> 杣山内の牛馬の放牧が禁止された 1737 年の 27 年前である。

### 1-3 研究者の「マキョ」解説

「まきよを牧也」と注釈した『おもしろさうし』にたいして、先達がどのような理解をしていたか、拙稿（長濱 2019）を再掲しつつ補足してみた。

伊波普猷は『琉球国由来記解説』（1940）で「国頭郡大宜味あたりでは、今は祭祀の時に限って、あの人は自分のマク（マキョ）ではないと排他的なことを云っている。夙に祖神を同じくする血族団体の居住する地域の義に転じて、現在に至っている」と述べている。このように伊波が各地の「マキョ」を実際に調査した段階では、牧の跡は確認されることはなく、血縁の人々が古い部落跡で祭祀を行う姿だけが目に付いたのであろう。その結果、「マキョ」の解釈を「血縁及び血縁部落」としたと考えられる。つまり、『校本おもしろさうし』（仲原善忠・外間守善 1965）が、21 巻 1441（あらさきのまきよ）に「血縁及び血縁部落をいう」という注釈の追加は、伊波（1940）の論考によるものであろう。

ところが、マキョ（マキ・マクは同義）を「血縁及び血縁部落」と解釈した伊波説に対し、仲松弥秀はもう少し深めた解釈をしている。仲松は『神と村』（1968）で、国頭村比地村落には、2 つの系統の御嶽があり、2 血縁集団から形成されていると見られるものがありながら、マキ名は唯一マツガママクとなっている。……「同一御嶽の氏子集団と、その村落とした方が良いと思う」と述べている。また、仲松は 1975 年 11 月、「仲松弥秀先生退官記念講演会」で「血縁的地縁集落といった方が適切ではなかろうか」とも述べている（南島地名研究センター編 2005『南島の地名』）。

マキ集団の構成について大山彦一（1960）は、「種子島では、マキは牧であるとともに、

牧を基盤とする血縁共同体である」と述べている。そして、血縁共同体マキは、第一義的には自然血縁者である。第二義的には、近世にいたって、此に擬制的血縁（地縁）を加ふるにいたる。第三義的者として、血縁、地縁の周辺の者で、牧の利用の機会を与えられる者として述べている。

このマキに対する大山の考え方は、琉球・沖縄でも通用すると筆者は考える。「沖縄のマキョ」について、大林太良（1995）や吉成直樹（2015）も「祭祀集団とその部落」だけを指すのではない。琉球は明国へ出す馬を牧で飼っていた。その牧を経営する単位として、マキョという言葉ができたのではないかと考えていると述べている。また、吉成（2015）は「御嶽が本来、ひとつの血縁集団が祀る拝所であったとしても、それが牧の経営単位になることによってマキ名を持つことになり、また、複数の血縁集団が併合されたとしても、御嶽は複数存在することになるが、それが牧の経営単位になるとマキ名はひとつだけになると思われる」と述べている。

これまで取り上げた「マキョ」の解釈を列挙してみよう。

①『沖縄古語大辞典』（1995）「マキョ」

血縁集団による古代集落。本土語の「まき」とほぼ同義。オモロ原注に「牧也」（21 巻 1441）

②『定本 おもろさうし』（外間守善・波照間永吉 2002）21 巻 1441

21巻1441 「 又 あらさきの、まきよに、

原注、まきよは「牧也」

③『校本おもろさうし』（仲原善忠・外間守善 1965）

21巻1441 「 又 あらさきの、まきよに、

原注（まきよ）は「牧也」とある  
血縁及び血縁部落をいう。

④伊波普猷『琉球国由来記解説』（1940）

マキョは、祖神を同じくする血族団体の居住する地域の義に転じて、現在に至っている「マキョ」は「血縁及び血縁部落」である。

⑤仲松弥秀『神と村』（1968）

マキョは、「同一御嶽の氏子集団と、その村落」。1975年11月、「仲松先生退官記念講演会」で「血縁的地縁集落」が適切だと述べている。

⑥大山彦一『南西諸島の家族制度の研究』関書院（1960）

「種子島では、マキは牧であるとともに、牧を共有する血縁共同体である」

血縁共同体とは、第一に血縁者、第二に、近世にいたって、擬制的血縁（地縁）を加える。第三に血縁、地縁の周辺の者で、牧の利用の機会を与えられる者。

⑦大林太良（1995）や吉成直樹（2015）は、「マキョについて、祭祀集団とその部落だけを指すのではない。琉球は明国へ出す馬を牧で飼っていた。その牧を経営する単位として、

マキヨという言葉ができたのではないかと考えている」との見解。

#### 1-4 おもろの「まきよ」の場所

福寛美氏によると、「まきよ」の場所がおおむね推定されるおもろは、次のようになっている。

巻10-540 (二例 あまみやふた・しねりやふた) 中頭郡西原町我謝杜

巻13-818 (「まきよ」・「いじけまきよ」) 国頭村辺戸の安須杜あたりか

巻20-1366 (まきよのかず) 島尻郡豊見城村我那覇の杜周辺か

巻21-1404 (あらかきのまきよ) 久米島具志川村西銘の新垣

巻21-1441 (あらさきのまきよ) 久米島具志川村兼城

上記の「まきよ」の場所を地形的にみれば、国頭村辺戸の安須杜だけが丘陵地にあり、他はすべて比較的平坦地である。福寛美氏(私信2019.4)は「始原集落(辺戸の安須杜はあまみきよが造ったとされています)、祖先神が降臨する場(久米島の新垣)、聞得大君の聖地(我謝杜)などがその用例として登場するのを興味深く思います」と述べておられる。この「まきよ」が謡われているような聖地には、馬が登場する場合もある。

巻10-514(うちいでは おしかけ節)の歌から、馬に関する部分だけ引用すると、「斎場御嶽で……真白雪のつま黒(白馬)に 金京鞍 依り掛け 銀京鞍 依り掛け……大君(聞得大君) 召しよわちへ(お乗りになって)」(外間2000)となっている。

渡名喜島には、麦穂祭に謡われるおもろがある。これは「神馬巡行のオモロ」である。その大意を引用すると、「沖縄最高の女官聞得大君がなしには、真黒の神馬に召されて、涼傘にあふられながら、早暁、国頭最北端にある安須杜の嶽に神詣されるという意味である」(稲村1968)。

国頭村辺戸の安須杜は、琉球最初の歴史書『中山世鑑』(1650)に記されており、沖縄最古の御嶽されている。安須杜のすぐ隣には、琉球最初の王統とされる舜天王統の第三代国王「義本王」の墓がある。こうした由緒ある国頭村辺戸の古い部落名は、「あしもりマク」である(国頭村誌2016)。おもろ巻13-818は、「あしもりマク」を絶賛し、次のように謡っている。

一安須杜の 切り口の 君の飲へ 清ら手折り富

又何れのふた 何れのまきよ 降れ欲しや

又意地気まきよ 意地気ふた 降れ欲しや [意地気は勝れたの義]

この首で「まきよ」にかかわる歌詞は「又何れのふた 何れのまきよ 降れ欲しや 又意地気まきよ 意地気ふた 降れ欲しや」の部分である。まきよの訳を「牧」にすれば「いず

れの牧、いずれの牧に、降りたがるのか。勝れた牧、勝れた牧に、降りたがるのか」となる。まきよの訳を「部落」にすれば「いずれの部落、いずれの部落に、降りたがるのか。勝れた部落、勝れた部落に 降りたがるのか」となる。いずれに解釈しても違和感はない。

北山王は1388年から1415年までの間に、明国の皇帝に188頭の献上馬を贈っている（長濱2014）。この北山王の貢馬の産地が、どこなのか探してみると、一部は島外からの持ち込みも考えられるが、地元では「あしもりマク」（安須杜の牧）などが産地候補としてあげられるのではなかろうか。

このように「まきよ」と呼ばれた聖地と、馬がかかわっている神歌は、まきよの中に馬が飼われていたことを示唆するものである。21巻1441の編纂者が「まきよ」を「牧也」と注釈したのは、牧の歴史を記している。古い時代の神歌を、私たちが現在理解するとき、「まきよ」をストレートに「牧」と解釈するよりも、「牧があった部落」という含みで理解した方が良く、単なる「部落」との解釈は、牧があった歴史を消してしまう危険があると考えられる。

#### 1-5 マキヨが呼称された時期

「マキヨ・マキヨ」という言葉が使われ始めた時期について、仲松（1975）は次のように述べている。

「マキヨという呼称は、私は第二尚氏の尚清王、尚元王の初期じゃないかと思っているのです。そして、この時に村ノロができた、もう一つはマキヨができたと考えてます。……『おもろ』の第3巻（尚寧王時代のもの）に「まきよまきよの のろのろ」出てくる。マキヨにはノロがいたと言うことになる。新しい編纂だから新しい『おもろ』だとは必ずしも言えないことは当然です。仮説ですが、「村ノロ」と「マキヨ」という名前が与えられたのか、置かれたのか。尚真王時代まで南方貿易が盛んだったが、尚清・尚元王時代から南方貿易は途絶えてしまった。王府の財政立て直しのために、領内から物資を補給しなくてはならない。そのためには領域内村々を統制しなければならない。王府が村々に対する支配力を強めるため、部落に対する公称名として「マキヨ」をつけ、「村ノロ」配置したのではないか。（仲松弥秀1975「沖縄のマキヨ村落」『南島の地名』南島地名研究センター編2005 40-41）

こうした「マキヨ」が呼称された時期についての「仲松の仮説」は、『おもろさうし』第1巻、尚真王の収録に始まり尚清王で編纂された時代を背景にしている。

この「仲松の仮説」とは、異なった見解もある。大林太良（1995）や吉成直樹（2015）は、「明国へ貢馬を調達するため牧がつくられ、マキヨ（牧）という言葉ができた」と指摘している。つまり、琉球の歴代王から明国の皇帝に贈られた献上馬・貢馬の動向から、「マキヨ」（牧）を把握しようとする視点である。これは、極めて大事な指摘だと思う。



## 2節 貢馬と牧

### 2-1 明国への献上馬・貢馬の動向

琉球の歴代王から明国の皇帝へ贈られた貢馬（献上馬）の動向について、拙稿「宮古馬のルーツを探る（3）－明国への貢馬の評価－『宮古島市総合博物館紀要』第18号2014』から、取り上げてみることにする。

①琉球から明国への貢馬は、受入の中国側の文献として『明実録』（国史）がある。また、送る側の文献として中山王府の外交文書・『歴代宝案』がある。この2つの文献は、時の権力者の立場から記録されたものだが、歴史上貴重な史料である。

②琉球から明国への貢馬の時期は、1374年から1680年までの306年間である。記録された貢馬数は3,192頭、進貢年は122年（73%）である。「馬及び方物貢す」との記録のみで、頭数不明な進貢年は46年（27%）間である。よって進貢年は168年（100%）となる。明の皇帝代ごとの平均貢馬数を乗じて試算した推定貢馬数は5,544頭である。

③琉球歴代王の進貢馬数は、次の表の通りである。貢馬の頭数は、文献に記載された頭数である。「馬及び方物貢す」と文献に記載されているが、頭数不明は含まれていない。

表1 琉球歴代王の進貢馬数（頭数は文献記載 回は進貢・海外貿易数）

王名	察度 (武寧)	山南王	山北王	思紹	尚巴志	尚忠
年度	1374--1403	1387--1429	1388-1415	1407-1419	1424-1440	1441-1447
貢馬	337頭	166頭	28頭	110頭	948頭	70頭
貿易					26回	4回

注：1385 海舟支給 1390 倭寇来襲

王名	尚思達	金福	尚泰久	尚徳	尚円	尚真
年度	1447-1452	1452-1453	1455-1462	1463-1470	1472-1477	1478-1529
貢馬	10回	5回	10回	146頭	173頭	772頭
貿易				17回	2回	25回

王名	尚清	尚元	尚永	尚寧	尚豊	尚賢—尚貞
年度	1530-1555	1557-1571	1573-1589	1591-1623	1630-1640	1642----1680
貢馬	147頭	50頭	49頭	48頭	58頭	30 20 40
貿易	10回	2回				

注：1547 海船支給停止 1570 年東南アジア貿易は閉幕 (長濱 2014)

④明国は 1385 年から 1547 年にかけて、仁字号船をはじめ盤、徳、寧、信、康字号など船名が記録された船が 20 隻、全体では 30 隻の船を琉球国の王に無償提供している。

⑤明国への進貢馬には、3 回の山場がある。1 回目は<sup>みつと</sup>蔡度王時代（三山時代）、2 回目は<sup>しやうはし</sup>尚巴志王時代、3 回目は<sup>しやうしん</sup>尚真王時代である。

以上のような琉球から明国への貢馬の動向から、「仲松の仮説」を検証すると、どうなるだろうか。測る物差しが、1 つは『おもろさうし』の編纂時期であり、他方は貢馬の動向であると異論が出ることは承知のうえである。ただ、「まきよ」、牧（マキヨ・マキ）を解釈するための大事な視点は、歴史的記録・史実が残された献上馬・貢馬の動向であると考えられる。

## 2-2 貢馬からみた牧

### ①尚真王の貢馬

貢馬の視点から、琉球の牧、マキヨ・マキの呼称の成り立ちを考えて見ると、どうなるだろうか。表 1 「琉球歴代王の進貢馬数」で見られるように、貢馬の山場は 3 回ある。1 回目は三山時代、2 回目は尚巴志王時代、3 回目は尚真王時代である。

第三の山場・尚真王の進貢馬からみてみよう。『おもろさうし』の神歌が初めて収録された時代である。琉球国の栄華を造ったといわれている尚真王は、1478 年から 1529 年までの 38 年間（『明実録』）に、28 回にわたり明の皇帝に献上馬 772 頭（文献記録の頭数）を贈っている。尚真王は、貢馬や硫黄などの見返りの品「下賜品の陶磁器等」を原資にして、東南アジアとの貿易を 25 回も行っている。貿易相手国はシャム（タイ）13 回、スマトラ（インドネシア）6 回、マラッカ（マレーシア）3 回、スンダ（インドネシア）2 回、ヴェトナム 1 回である。

ところが、尚真王からの貢馬は、年年減少傾向をみせるのである。弘治代（1488-1504）は、2 年に 1 貢しか許されず、1 年当たり 47 頭（推定）の貢馬を進貢している。時代は進み、正徳代（1506-1521）になると、尚真王は 1 年 1 貢を許されるが、貢馬は 1 年あたり 17 頭（平均）と激減する（長濱 2014）。その後の中山王である<sup>しやうせい</sup>尚清王は、貢馬数 147 頭、海外交易回数 10 回となり、<sup>しやうげん</sup>尚元王が貢馬数 50 頭、海外交易回数 2 回になっている。尚清王の時

(1547年)に明国からの海船の無償提供は停止され、尚元王の時(1570年)に「東南アジア貿易」は閉幕するが、それに合わせて、琉球からの貢馬数は激減し、朝貢儀礼的な品に転換する。

尚真王が亡くなり、後継ぎの尚清王を冊封するため1534年に来島した陳侃<sup>ちんかん</sup>が、琉球の馬の記録を残している。「琉球には馬が多く、値段は安い」(陳侃『使琉球録』訳注原田1995)。原田の訳注では、馬は欠落しているが、原文では「是以多野馬牛豕價廉甚每一值銀二三錢」となっている。このことから、明国への貢馬は減少するものの、琉球内で野馬(放牧馬)が多く飼われており、馬の生産は安定していたことが明らかである。

先に触れた「仲松の仮説」は、『おもろさうし』第一巻の編纂時期に、「まきよ」という呼称は使われ始めたと言うことであった。ところが貢馬の動向からは、尚真王以前にすでに牧があり、「まきよ・マキヨ」と呼称されていたと考えられる。

## ②尚巴志王の貢馬

次に、進貢馬の第二の山場・尚巴志王時代はどうだろうか。

尚巴志王には、1年1貢の制限はない。とても優遇されている。いわゆる「朝貢不時<sup>ちようこうふじ</sup>」である。尚巴志は1424年から1440年までの16年間にわたり進貢しているが、貢馬は1年に4回から5回も献上している。年平均の進貢回数は4.3回である。そして1年あたりの平均貢馬の推定数は、67頭(宣徳代)である(長濱2014)。尚真王の1年平均貢馬数47頭(弘治代)、17頭(正徳代)に比べて、かなり多くなっている。

尚巴志王の貢馬数は、『明実録』と『歴代宝案』に明記された頭数だけでも948頭である。貢馬や硫黄などの献上品の見返り品、いわゆる下賜品<sup>かしてひん</sup>として受け取った陶磁器を用いた海外交易回数は26回である。尚巴志王時代の一航海における琉球からの交易品は、『歴代宝案』によれば、中国産の陶磁器が大部分を占め、大青盤20個、小青盤400個、小青碗2千個と量も定まっていた(和田1994)。これは交易船の積載限量との見方がされている。

貿易国はシャム(タイ)が23回で、ジャワ(インドネシア)が3回、朝鮮が1回である。

『琉球国由来記』によれば、尚巴志王の時代に「駅」がつくられたと記録されている。「駅」とは、近世になって番所と言われた所で、王府の命を地域に伝えたり、上納物を集める所であった。当時の「駅」には駅馬、伝馬と馬番が配置されていた。尚巴志王の使いは、貢馬を明の皇帝に届ける際、明国の駅に立ち寄り、駅馬も利用したであろうから、その影響が考えられる。尚巴志王の「駅」の設置と駅馬の利用は、統一国家づくり具体的な証でもある。

『琉球国由来記』には、「尚巴志王の駅」に続き「読谷山間切比謝に牧有り」と記録されているものの、設置された時期は不明とされている。「駅」の設置と貢馬数の動向から考え

れば、尚巴志王の時代かそれ以前に「読谷山間切比謝の牧」がつくられたことが窺われる。

『おもろさうし』には、中山王察度の弟・泰期<sup>たいき</sup>が読谷山の英雄として称賛され（15-1116）、唐商い（朝貢貿易）を盛んにした立派な泰期様と謡われ（15-1117）、渡航して明の立派な城を見てきた泰期様と称えられている（15-1118）。15 卷-1119 の首では、「宇座の勝れた泰期様には、霊力のある浄め水を奉<sup>たてまつ</sup>れ、宇座や渡慶次の馬駄<sup>うまた</sup>（馬引き）や長老たちは神酒を運びお祝いしよう」と謡われている（外間 2000）。これらのおもろからは、察度王の弟・泰期と読谷山、唐商い、そして馬駄（馬引き）のつながりを知ることができ、読谷山間切比謝の牧の存在が窺われる。マキヨ・マキの呼称は三山時代までさかのぼることができそうである。

### ③三山時代の貢馬

明国が琉球に朝貢を求めたのは 1372 年である。『おもろさうし』の 15 卷 1116 から 1119 までの 4 首で謡われた読谷山の英雄・泰期<sup>たいき</sup>は『明実録』にも記録されている。琉球国中山王察度の弟として 1372 年に明国に渡り、表（上奏文）を差し上げ方物を献上して朝貢受託を明の皇帝に伝えた人物である。泰期はその後も連続して 4 回、明国に派遣されている。1374 年には「馬及び方物を献上」、1376 年には「表を奉り謝恩し方物を献上」、1377 年には「貢馬 16 匹を献上」、1382 年には<sup>あらんほう</sup>亜蘭匏とともに「貢馬 20 匹を献上」している（『明実録』）。このようにおもろで読谷山の英雄として称えられた泰期が、中山王察度の弟として明国に 5 回も派遣され、馬及び方物を献上することで、三山時代の朝貢貿易は本格的に行われたのである。

朝貢貿易を受け入れた 1372 年から 1385 年までの 13 年間に、三山時代を形づくる画期的な事態が見られる。第一は明の皇帝が三山の王権を認めるために金銀印鑑を授けたことである。中山王察度は 1383 年、山南王承察度と山北王<sup>はんにしよ</sup>怕尼芝は 1385 年に、王様の権威を示す印鑑を授かっている。これは、明国との公的貿易ルートの設定を意味している。

第二は朝貢貿易の品として、馬を重視したことである。明の皇帝は、1374 年に琉球から馬を購入するため、李浩という使いを派遣し、その 2 年後の 1376 年に 40 頭の馬を買い取っている。また、1383 年には 983 頭の馬を買い取っている。朝貢貿易の初期に、明国が琉球から多くの馬を買い取った理由は、明国が蒙古の騎馬軍団の来襲に備えて、軍馬を整備する事情もあったかも知れないが、琉球からの市馬（購入馬）は、朝貢品として馬を贈ってほしいとの、三山王に対する明国の強いメッセージだったと考えられる。

第三は明国が琉球にたいして海船を無償提供したことである。1385 年に中山王と山南王に海船を提供しているが、この時に山北王の名前は、『明実録』にはない。明国は、洪武・永

楽年間に 30 隻の船を琉球に提供している。この船では、一隻あたり馬が 20 頭から 25 頭も積まれていたことから、大動物の馬を運搬するには、都合の良い船だった。

第四は貢馬の数が多く見られるものの、その一方で少ない貢馬を届けた事例が見られることである。察度王の弟・泰期が届けた献上馬は少ない事例である。三山時代の貢馬を平均すれば、年 66 頭が明の洪武帝に献上されているが、多い事例として 1386 年には 124 頭、1394 年に 90 頭、1410 年に 110 頭の貢馬が贈られている。このうち 2 回は中山王察度の右腕ともみられている亜蘭匏が届けている。

亜蘭匏は在任中 10 回にわたり明国に派遣されているが、彼が届けた献上馬は、多い時と少ない時が入り交じり、とても不安定である。亜蘭匏が明の皇帝に届けた貢馬は、『明実録』の記録によれば、1382 年に 20 頭、1386 年に 124 頭、1387 年に 37 頭、1390 年には 26 頭、1394 年に 90 頭、1395 年に 18 頭である。1383 年と 1388 年、1391 年、1398 年は「馬及び方物貢す」と記載され頭数はわからない。

この記録で明らかなように、亜蘭匏が届けた貢馬は、多い時で 100 頭前後、少ない時には 18 頭である。とても頭数が安定していないのである。亜蘭匏は察度王の重臣であり、「太祖実録」（洪武 27 年）には王相と名乗り、皇帝から秩正五品と冠帯を授けられた人である。本来だと明の皇帝に絶えず多くの貢馬を献上し、それ相当の下賜品を受けるべき立場の人である。18 頭とか 20 頭という貢馬数は、当時の琉球国内に馬の生産が不安定であったことを意味しているのではなかろうか。その一方、明国が琉球から購入した 983 頭の大量の馬、そして、貢馬が 1 進貢で約 100 頭にも上ったことを、どう理解すべきだろうか。沖縄島外から、馬が持ち込まれたと考えざるを得ないのである。

### 2-3 983 頭の購入馬の謎

1383 年に明国が琉球から購入した 983 頭の馬については、拙稿「宮古馬のルーツを考える」で取り上げたので、以下引用する（『宮古島市総合博物館紀要』第 16 号 2012 12-13）。

1383 年の琉球国内の馬の数は、3 千頭以内ではなかつただろうか。生産面の他に流通面でも問題がある。にわかを集めた馬は、集団行動に耐えることはできない。983 頭の購入馬の船輸送は、中山王府に負わされているが、1 隻あたり 20~25 頭積み込むとしても、集団馬の輸送は危険と困難を伴い、素人にはできない。

983 頭の購入馬の謎を解くためには、第一に日頃から馬扱いに慣れた集団がいること。第二に多くの馬を集めて牧で飼育している集団がいること。第三に馬の去勢技術も持ち合わせ〔『大明會典』卷 108 朝貢通例の馬の規定に驪馬（去勢馬）有り〕、馬の船舶輸

送や集団行動ができるよう調教訓練を行える集団がいること。これら集団の存在なくしては、983頭の謎解きはできない。

その集団とは倭寇集団が考えられる。田中（1987）によれば倭寇は、巨大な人員、船舶、馬匹を擁した集団だったと述べ、『高麗史』などから数字の判る事例を取り上げている。

「獲馬 1,600 余匹（1380 年 9 月）、斬 20 級・獲馬 70 匹（1381 年 6 月）、獲男女 50 余人・馬 200 余匹 斬 80 余級・獲馬 200 余（1382 年 4 月）、獲馬 60 匹（同年 5 月）倭賊 200 余騎（1383 年 7 月）、獲馬 72 匹（同年 10 月）、2 奪本国被虜 20 余人（1384 年 11 月）、 獲馬 60 余匹（1388 年 8 月）」

このように『高麗史』には、倭寇集団が略奪した馬を「獲馬」、拉致した人たちを「被虜人」と記録している。では倭寇集団は、その後「獲馬」や「被虜人」をどうしたのか。「被虜人は日本国内で「奴婢」として奴隷的に使役されることもあったが、多くは送還や転売など一種の交易の対象とされていた。室町政権下の諸大名、諸豪族、商人を通じたり……さらに琉球に転売された被虜人を琉球国王が朝鮮に送還する方法などがあった」（田中 1987）。

そのルートについて李薫（2011）は、「九州の国際貿易港である博多で被虜人の売買が行われた後、三州（薩摩・大隅・日向）に売られ、さらに琉球の那覇に転売されていた（『世宗実録 5 月』）」と述べている。琉球の那覇は、当時中国と東南アジアを結ぶ国際的中継貿易地で、倭寇によって拉致された朝鮮人被虜人たちを売買する東アジア最大の奴隷市場でもあった（李薫 2011、田中 1975）。このように見てくると、倭寇集団は取引商もしていることから、海上商人として活動していたことになる。

琉球が朝鮮人被虜人を送還するのは、1389 年が始めである。中山王察度が使者に託して被虜人若干名を刷還（送還）している。『朝鮮王朝実録』には「太祖元年、琉球国中山王察度、臣を称して書を奉り通事李善等を遣わして礼物を進貢し、並びに被虜の男女八口を送還す」と記録され、朝鮮建国の初年・1392 年に男女 8 人の被虜人を送還している（池谷ら 2005）。

「この送還の主な目的は、貿易の機会の拡大である」（李薫 2011）とされている。中山王察度は倭寇集団から被虜人を買取り、貿易の対象にした場合、どのような手法をとったであろうか。倭寇集団が海上商人（海商集団）であれば、中山王府は被虜人の送還や見返り品の受け取りという貿易の仕事を、未経験の人にさせることはあるまい。倭寇を中山王府の仲間に入れ、久米村の「閩人 36 姓」と共に朝貢貿易の仕事をさせれば、事は難しくない。

1392 年に建国された朝鮮の倭寇対策についてみてみたい。「朝鮮は武断と懐柔の両面の政策によって、倭寇の沈静化を図った。日本に使者を派遣して、倭寇鎮圧と被虜人の送還の外交交渉を行う一方、倭寇たちに直接的な働きかけを行った。具体的には、倭寇たちにさまざまな特権を与え懐柔しようとしたのである。朝鮮は倭寇たちに向化（投化）を呼びかけ、向

化する者に対しては、優遇策を取り土地・財産を支給して朝鮮国内に安住させたり、技術者には名目的な官職を与えたりした（佐伯 2006）。

『朝鮮王朝実録』によれば、「太祖 3 年（1394）中山王察度は、遣使して箋を奉り礼物を献じ、被虜の男女 12 人を発還（返還）し、在逃の山南王の子承察度を発回（引渡し）するを請う」と記録されている（池谷ら 2005）。その後 1397 年には、漂着民を含む 9 人を送還している。1409 年には中山王思紹が男女 3 名を送還しながら、公貿易を要請している。中山王思紹は 1410 年に 14 人、1416 年に 44 人を送還している。被虜人の送還は、文献記録『朝鮮王朝実録』では 1437 年までみられる。こうした経過からは、略奪行為をしていた倭寇集団が「平和的」な貿易に関与して海商集団となり、三山勢力と連携したことが窺われるのである。

こうした被虜人を交易の対象にした史実からすれば、倭寇が略奪した「獲馬」は一時、壱岐、対馬、五島列島の中の馬牧（細井 2006）か、奄美諸島の沖永良部の馬牧（吉成・福 2007）などで飼われ、商談が成立した段階で、中山の港に持ち込まれ、明国に購入された可能性が高い。

明国が 1383 年に琉球から購入した 983 頭の馬も、倭寇が略奪し沖永良部の馬牧などで飼育されていた馬ではなかつたろうか。明国への貢馬が、1 回の進貢で 124 頭（1386 年）、90 余頭（1394 年）、110 頭（1410 年）と多くなっているが、この馬は琉球国の馬ではなく、倭寇が略奪した朝鮮馬だったかも知れない。

古代の朝鮮には果下馬も存在したが、北方との関係が生ずるようになり、匈奴や中国から蒙古馬や満州馬などの中形馬が導入された（林田 1978）。また、1276 年にモンゴルの直轄地となった済州島には、蒙古馬が持ち込まれ牧が設置された（金日宇 2015）ことから、倭寇が朝鮮から略奪した馬は蒙古系で、体型は中形馬であったと考えられる。田中（1987）も「倭寇集団の大量の馬匹には、済州牧のものも多く混じっていたに相違ない」と述べている。

ここで奄美諸島沖永良部の、馬牧に関するおもしろを取り上げてみよう（吉成・福 2007『琉球国王誕生』）。

卷 1 3 - 9 3 6 首里ゑとの ふし

一永良部世の主の  
選でおちやる御駄群れ  
御駄群れや  
世の主ぢよ 待ち居る  
又離れ世の主の  
又金鞍 掛けて  
与和泊 降れて

沖永良部世の主  
選んでいらっしゃる馬の群れ  
馬の群れは  
世の主をこそ 待っているのだ  
離れ世の主の  
金鞍を掛けて  
与和の港にお降りになった

「このおもろの前半では、沖永良部島の世の主（地方的な王）が選んでおいた馬の群れが、その世の主を待っている、と謡われている。沖永良部島は隆起珊瑚礁によって形成された平坦な島であり、馬を飼うのに適しており、琉球の牧としての性格を持っていたことは十分考えられる。馬の供給地のひとつであったのではないかということである。」

「月しろ」は倭寇の守護神であった八幡神に密接に結びついており、沖永良部島が八幡神を守護神とする倭寇の重要な拠点であったと考えられるからである（吉成・福 2007）。

#### 2-4 三山時代の倭寇と進貢馬

このように見てくると、琉球から明国への貢馬に、倭寇が深く関わっていたことがうかがわれる。明の洪武帝の使者・李浩が、琉球から馬を飼うため 1374 年 12 月 24 日に来島して、1376 年 4 月 10 日に 40 頭の馬を購入し帰国している。この 1 年 4 ヶ月間は、李浩らが倭寇集団と直接交渉する期間で、交渉の成果が 1383 年に購入した 983 頭の馬だと考えられる。

三山ルートの貢馬が、どれだけの価値で評価されたかを明らかにすれば、倭寇集団と三山王との深いつながりが浮き彫りにできる。

池谷望子（2011）は、明国が 1376 年に琉球から 40 頭の馬を購入した対価は、「文綺百匹、紗・羅各 50 匹、陶器 6 万 9 千 5 百事、鉄釜 9 百 90 口」であったことから、琉球馬の 1 頭当たりの価格は、生絹 5 疋、陶器 1,500-1,700 個、鉄釜約 24 個と推定している。金銭換算では、銀 18.6-19.1 両の価格と算出している。池谷は当時の明国では、上上馬が銀 20 両、上馬が銀 10 両、中馬が銀 7.5 両で取引された『明実録』の市馬事例を紹介し、琉球の馬は高価で買われたことを裏付けたのである（池谷 2011）。

明の皇帝は、琉球からの貢馬に対して、市馬（購入馬）同様の対価を下賜品（見返り品）として与えている。貢馬に関わっていた倭寇たちは、沖永良部の牧（吉成・福 2007）などから馬を持ち込み、公的貿易ルートである三山王経由で明国に馬を送り出し、膨大な富を得たと考えられる。そして、持続的に貢馬を調達する方策として、三山の在地勢力と手を結び、略奪した馬を琉球に運び込み、保留・生産場所として「沖永良部島の牧」のような馬牧をつくったことが十分考えられる。こうして、琉球の牧（マキョ・マキ）はつくられたのではなかろうか。牧は広大な原野の確保や馬の捕獲場の設置など、組織的な力を結集してできるものである。当時、自然発生的な牧は存在しない。

馬の導入や牧の管理技術・馬具等は、九州・薩南・奄美経由で渡来している（長濱 2012）。琉球馬の末裔として残されている宮古馬や与那国馬の遺伝学的調査によれば、九州の対州馬や御崎馬と親戚関係にある（野澤・庄武 1981）。考古学的にはグスク時代の遺跡である今帰仁城跡Ⅲ（樋泉 2008）喜屋武グスク（具志川市教委 1988）などから馬歯骨が出土している。



『明実録』によれば、貢馬を明の皇帝に届けるに当たって、三山王が相互に提携している。このことは、見落とすことができない事柄である。つまり、三山王は敵対関係ではなく、連係プレーして明国へ貢馬を届けていたのである。

『明実録』の記録では、1388年9月16日の同じ日に、中山王察度と山北王<sup>はんにじ</sup>怕尼芝の使者が明の皇帝に貢馬を贈っている。1390年1月26日も中山王と山北王の正使が、ともに貢馬を届けている。1395年1月1日には、中山王察度、山北王<sup>みん</sup>珉、山南王<sup>おうえいじ</sup>汪英紫など三山王の正使が、そろい踏みで皇帝に拝謁し、貢馬を献上している。1396年1月10日には、中山王察度と山北王<sup>はんあんち</sup>攀安知の使いが、ともに貢馬を届け、同4月20日には中山王<sup>きつと</sup>察度と山南王<sup>しやうきつと</sup>承察度の使いがともに貢馬を届け、同11月24日には中山王<sup>ぶねい</sup>世子武寧と山北王攀安知の使いが貢馬を届けている。1397年2月3日には、中山王察度と山南王汪英紫、そして山北王攀安知の三山王の使いが、そろい踏みで皇帝に拝謁し貢馬を届けている。同12月15日には中山王察度と山北王攀安知の使いが貢馬を届けている。以下1403年3月14日は中山と山南、1408年3月26日は中山と山南、1413年4月21日は中山と山南、1415年4月19日は中山王思紹と山北王攀安知の使いが進貢馬の行動をともにしている。この年は、『中山世譜』が伝える「1416年に北山城の主・攀安知は中山王の尚巴志に滅ぼされた」前年である。

明の皇帝の使者・楊<sup>ようさい</sup>載が、察度王を訪ねて朝貢を促したのが1372年である。察度は1374年に弟の泰期を明国に派遣、「馬及び方物」を献上している。それから1429年までの55年にわたる三山時代に、「三山王」から38回にも及ぶ進貢馬が明国に送られている。そのうち中山王と山北王の共同行動は5回行われ、中山王と山南王は4回の共同行動、三山王がそろい踏みしたのは2回で、合計11回となる。

こうした、およそ3回のうち1回、共同歩調をとった三山時代の貢馬の動向は、何を意味しているのだろうか。この『明実録』の記録からは、三山王が敵対していたとは、どうしても考えられない。三山の在地勢力は、敵対関係にあるけれども、その裏で貢馬に係わる倭寇勢力に、なんら敵対意識をもつ必要はなかったとみるべきだろうか。三山からの明国への重要貢物に硫黄があるが、山北領域の硫黄鳥島産の硫黄が三山王を経由している。これも、貢馬同様に倭寇に係わっていたと考えれば理解しやすい。

三山時代の在地勢力と倭寇との係わりについて、吉成直樹と福寛美の共著『琉球王国と倭寇』（2006）に注目すべき見解が示されている。山北王の「怕尼芝は今帰仁に近い羽地に由来するものであろう」。「攀安知の『攀』は中国語でPanと読むが、<sup>すうんろう</sup>孫薇氏のご教示によれば、これは bafan からの転訛と解することができるという。bafan は「八幡」の明代の中国語読みである。つまり、〔山北王攀安知は〕「八幡按司」ということである。今帰仁ゆかりの神女である<sup>あお</sup>煽りやへが、おもしろのなかで三巴紋にかかわり、しかも八幡信仰と密接にかかわる存在であることと符合する。まさに、倭寇が明に朝貢していた事実を知ることができ

るのである」（吉成・福 2006『琉球王国と倭寇』）。

山北王の攀安知が「八幡按司」であり、倭寇の頭領だったとすれば、在地勢力に倭寇が一体化していたと言うことになる。これらの記録は、琉球から明国への貢馬が、倭寇と三山王を繋ぎ合わせる役割をにない、貢馬が倭寇集団を海商集団に変え、そして琉球と明国を繋ぎ合わせる戦略物資であったことを明らかにしている。したがって、貢馬の安定的調達のため、三山王が倭寇とともに馬牧を造り上げ、牧の管理を重視したと考えられる。そして、馬の生産地を区分するために、それぞれの牧に〇〇マキヨ（マキ・マク）という呼称を付けたと考える。仲松弥秀（1975）はマキヨが奄美大島まで使われたことを確認しており、また、福寛美氏（私信 2019）は、辞典にはマキヨの同義語のクダやフタが沖縄諸島から奄美諸島まで分布していると指摘している。マキヨの呼称は、三山王の影響を受けた領域に限られているのである。

### 3 節 マク（マキヨ）部落の祭祀

#### 3-1 国頭村比地・小玉森の祭祀

国頭村字比地の小玉森は、マツガママクとも呼ばれ、マキヨ部落で部落発祥の地とも言われている。古くから神アシャギがつくられ、聖地として崇められている。小玉森は 45m の丘陵地にあり、土堤に囲まれた平場には、神アシャギ、拝所、火の神の祠が設けられ、赤木の太木 5 本が神の宿る神木として、各門中の人たちに崇められている。古くは 2 つの宗家を元にしており、現在は山城氏、山川氏、大城氏、前田氏、枝川氏が祭祀を受け継いでいる。平場の西と南斜面には、宗家の屋敷跡が残されている（国頭村教育委員会 2013）。また、平場の東側には、尾根筋を遮断する形で堀切があり、南側にも堀切がある。この堀切は、以前に神役たちの通路として使われていたため、神道と呼ばれていたようだ。

「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」（長濱 2019）で、鹿児島県種子島の馬牧を構成する要素が 8 つあると述べた。小玉森を囲む山林原野や河川などの自然環境、残された平場、掘りや土手、屋敷跡、神木などや、そして古くから呼称されてきたマツガママクという地名などから、「馬牧を構成する 8 つの要素」が立証できると述べた。

ここでは、国頭村比地の伝統祭祀「ウンジャミ」の中に、猪狩りの儀礼があることから、猪狩りとマキ（牧）のつながりを裏付けるものはないのか、調べてみた。

なお、沖縄北部のウンジャミで「猪狩りの儀礼」が過去に行われていた集落は、国頭村の奥、安波、与那、辺土名のほか、大宜味村謝名城などである（『名護市史叢書 15』）。

### 3-2 比地ウンジャミの見聞記 -2019年の祭り-

ウンジャミとは海神祭のことである。地域の人たちはウンジャミと呼んでいるが、ここでは、祭祀であることを強調するため「ウンジャミ祭」と記す。このウンジャミ祭は、旧盆明けの亥の日（旧暦干支の猪の日）に行われる。2019年は8月18日（旧暦7月18日）に執り行われた。この祭祀は比地、奥間、桃原、鏡地、浜の5ヶ字で構成されており、奥間ノロが司祭する神行事だとされている。最初は比地の小玉森でウンジャミの祭りをを行い、その次は奥間のノロ殿内に移動して同様の儀礼を行い、最後は鏡地の海岸「ナガリ」に行って御供物を海に流して終了するとのことである。

知花（1982）の「村内におけるシヌグ及びウンジャミの分布」『国頭村文化財調査報告書』第1集によれば、比地のウンジャミ祭は小玉森の神アサギの庭で行われ、祭祀の進行は従来、次のようである。

- (1) 御水撫の儀礼・・・・・・・・（神アシャギ内で神役の人が、この儀礼で神となる）
- (2) 各門中代表による神人拝み・・・・・・・・（神アシャギ内で根神を拝み神酒を頂く）
- (3) 神遊びの儀礼・・・・・・・・（海の神と山の神を迎え、歓迎の舞をする）
- (4) 猪狩りの儀礼・・・・・・・・（山の神は勢子役、海の神は猪を捕る役を演じる）
- (5) 造船と航海の儀礼・・・・（舟に乗り大和旅を演出する）

（ ）内は筆者による。

今回（新暦2019年8月18日）は、祭祀の役割の一端を担う門中に不幸があり、御願や儀礼が省略して行われた。それについては、あらかじめ比地の区長から、神アシャギ前に集まった人たちに説明があった。神アシャギ内で行われる1番目の儀礼「御水撫の儀礼」と第2番目の「各門中代表による神人拝み」儀礼は省略された。今回最初に行われたのは、自治会役員2人の女性による祈願であった。神々に向かって線香を焚き、酒と供物を供えての祈願であった。神役の女性からは、山の神に豊作繁栄を祈願したと説明された（写真①）。

神アサギ前の「遊び庭」（ウマー、ウナー）とよばれた広場には、長いテーブルによって供物壇がつくられていた。その上に御神酒、お米、ミカン（シークワサー）、カーサムーチー、小魚、小蟹、豚肉（猪肉代わり）等の供物が、それぞれお膳にのせられ供えられていた。魚などの海の幸と、豚肉（猪肉の代わり）やミカンなどの山の幸を供物として準備したのは、海の神や山の神に感謝するためであろう。そのほか、パパイヤの実で包んだ生きたネズミ（模型）が、竹竿に吊してあった（写真②）。ネズミは害虫なので、「虫払い」のために準備されたものと思っていたが、聞くところによれば、ネズミは猪の代わりで、ウンジャミ祭の最後に、海岸に持っていき、海の神に捧げるといふ。神に生きた動物を捧げることは、生け贄

との意味があるだろうか。

自治会役員による山神への祈願が終わると、儀礼3番目の「神遊び」が行われた。神役を担う自治会役員たちは、頭に草の冠をかぶり、供物壇の前で円形の隊列を組んだ。山草の冠は山神を表し、海草の冠は海神を表しているとのことである。小太鼓と神歌にあわせ、両手を左右に振りながら、二歩前進、二歩後退の動作を繰り返すだけの踊りである。神歌は録音テープを拡声器で流していたが、「タマガーラ買いに大和旅に上がる」キューナだという。

神遊び儀礼が終わると、その次は4番目の「猪狩りの儀礼」である。神アシャギ前の広場には竹籠が置かれた。竹籠は猪の代わりだという。今回は海神を男性（初老）1人が務め、弓矢を持って現れた。また、山神が鼓をたたいて出てきた。先ほどの「神遊び」で歌われた「タマガーラ買いに大和旅」のキューナが拡声器で流された。ここでも小太鼓と神歌にあわせ、両手を左右に振りながら、二歩前進、二歩後退の動作を繰り返すだけの踊りが披露された。その後は、山神によって勇壮な囃子歌「ハンニガーラ・ホーエーヤー」が唱えられ、鼓も頭上高く打ち鳴らされるようだが、今回はこの囃子歌は省略された。ここでは海神が大弓に矢をつがえ、猪代わりの竹籠をめがけて矢を放った。参拝に訪れた青年が海神から急きょ呼び出された。竹籠の中に頭を突っ込み、四つん這いで暴れ回る猪の役を命じられた。青年は喜んで応じ、ぎこちないながらも指示された役を演じてくれた。また、猪に噛みつく猟犬の役も、参拝に訪れていた別の若者が、海神から指名されたが、この若者も笑顔で応じてくれた。「猪狩りの儀礼」の最後は、海神が槍を持ち出してきて、猪代わりの竹籠を刺した。これで猪は仕留められたということになる。この儀礼は、昔の狩猟の再現でもあろう。

ウンジャミ祭の最後の儀礼は、5番目の「航海儀礼」である。神アシャギの遊び庭には、6尋（10m）の綱が舟を描くように置かれていた。綱の前方と後方に勢頭役（船頭、船員）が立ち、両手で綱を張り、その中に海神と山神を入れた。舟に見立てた綱の中で海の神、山の神たちは「ハンニガーラ・ホーエーヤー」の囃子歌を斉唱し、歌が終わり次第、海の神が供物壇からミカン（シークワサ）をとり、頭上からまき放った。大和から持ち帰った富（ユ）を、お土産に与えるとの意味のようだ。参拝に訪れた人たちが、シークワサを大事に拾い集めた。そして、神役とともにカチャーシーの歌舞を演じた。これで比地の神アサギにおける神行事はすべて終了したのである。その後、神役たちは車で奥間のノロ殿内に向かっていった。奥間の神アシャギ前でも、比地同様の儀礼が行われるようで、その次に、鏡地の浜辺に移動して、パイアの実で包んだネズミ（猪の代わり）を海に流すとのことである。今回、神役たちは車で移動したが、聞くところによれば、比地のウンジャミ祭では以前、根神の出入は、神アシャギ横側の堀切（窪道）であった。また、根神は輿こしに乗ったようである（『名護市史叢書』15）。

沖縄北部では、神人が拝所に移動するとき、古くは馬や駕籠が使われている。大宜味村塩屋のウングミ記録（塩屋ウングミ刊行委員会 1986）によれば、根神の乗り物は、最近まで駕籠と黒い馬だった。大宜味村謝名城のウングミでは、「ノロは馬、他の神女はカゴに乗った」（『名護市史叢書』15）、伊平屋村田名のウンジャミ祭でも神女たちは、馬に乗って祭祀場に出向いている。海神の乗る馬は黒色（オーギー）と決まっている（『名護市史叢書』15）。羽地村のウングミでも「仲尾のノロは馬に乗って仲尾アサギにやってきたが、現在は車を使う」（『名護市史叢書 15』）。今帰仁村のウンジャミ祭でも、馬が神女たちに曳かれている（今帰仁村ホームページ）。このように沖縄北部のウンジャミ祭では、ノロなどの神女が馬に乗って移動していただけでなく、神歌のなかにも、神を運ぶ神聖な馬がよく謡われている。

### 3-3 比地ウンジャミの学術調査

比地のウンジャミ祭については、戦前から今日まで多くの学術調査が行われてきた。1927（昭和2）年、宮城真治が調査した『宮城真治民俗調査ノート』、1938（昭和13）年、宮本演彦が調査した『沖縄国頭村比地の海神祭』、1963年に調査した稲村賢敷『沖縄の古代部落マキョの研究』（1968発行）、宮城栄昌編『国頭村史』（1967発刊）、玉栄清良『平敷屋朝敏の文学』（1973発刊）、大城学「国頭村比地のウンジャミ祭の神歌」（1991）などである。

名護市史編さん室では、上記の文献を比較検討し、中鉢良護が執筆した「国頭村奥間・比地のウンジャミの神歌」を『名護市史叢書 15』（1997）に掲載している。祭りの時に謡われる神歌が、どのように伝承されているのか、その実態が浮き彫りにされており、祭祀儀礼を考える上でも貴重な資料である。

ここでは、稲村が1963年に調査した「国頭村字比地のウンジャミ祭」を取り上げてみたい。この稲村の論説を取り上げる理由は、『国頭村文化財調査報告書』第1集（1982）「比地のウンジャミ祭」でも、稲村（1968）の調査記録が重視されているからである。その中から、比地ウンジャミ祭の全体像と猪狩り儀礼・神歌について引用してみた。

#### ①比地のウンジャミの全体像

「ウンジャミ祭は海神に係る祭祀であり、比地のウンジャミ祭が昔から行われてきたものであると思う。地域によって爬竜船競漕を行っているところもあるが、それは後世になってから中国浙閩地方の霊祭で行われている爬竜船競漕が沖縄に伝わったものである」（稲村1968）。

稲村は本文に追加して、ウンジャミ祭に次のような5つの意味があると記している（「附ウンジャミ祭の解釈 372-386頁」）

第一に、海神の御加護に感謝する意味の祭祀である。

第二に、島（村）立てした始祖（創生神）に対する祭りである。

第三に、古代人（グスク時代）の信仰と生活が行事に依って最も示されている。

第四に、ウンジャミ祭は狩猟の行事である。

第五に、ウンジャミ祭の供物によって古代人（グスク時代）の生活を推察できる。

以上のような稲村見解からすれば、ウンジャミ祭を海ではなく、山（部落発祥地の小玉森）で行うのは、村立てした始祖（創生神）を祀るところ・小玉森の神アシャギに、海の神と山の神をお招きし、神々への感謝の意を表するためである、と理解することができる。つまり、海神祭をなぜ山（小玉森）の中で行うのか、その意味を知ることができる。

## ②ウンジャミの猪狩り儀礼

稲村は1963（昭和38）年に行われた比地ウンジャミ祭の猪狩り儀礼を、次のように記録している。

「根神たちは神アシャギに入って白の神衣装から、赤、黄、青等の大柄模様の派手な服装（狩りの衣装）に着替える。そして山神6人が鼓を打ち鳴らしながら神アシャギを出て遊び庭に並ぶと、続いて海神4人も神アシャギを出て、山神と向かい合って半円の他の側に立ち並ぶ。海神は左手に大弓を持つ。大弓は紅白の布を巻き付け両端に美しい房をつけて飾ってある。右手には鉄鏃てつぞくのついた箭や3本を持つ。山神と海神は向かい合って円形に立ち並び、山神は鼓を打ち鳴らしながらキューナを歌い、海神はこれに調子を合わせて前と同じように、両手を左右に振りながら二歩前進、二歩後退の動作を繰り返す。これ迄は始めの神遊びと全く同じで、キューナ歌も前述の「タマガーラ買いに大和旅上る」が繰り返される。」（稲村1968）

この歌が終わると一段と勇壮な囃子が山神隊に依って唱えられ、鼓も頭上高く打ち鳴らされる。「ハンニガーラ・ホーエーヤー」、「ハンニガーラ・ホーエーヤー」（囃子）「この時、1人の男が手頃の竹籠を遊び庭の中央に押しやると、海神の1人が現れて大弓の矢をつがえて此の籠を射る。籠は猪の代わりであって海神がこれを射殺す所作をするのである（写真③）。この所作の間、鼓の音とキューナ歌声は絶えず聞こえてくる」（稲村1968）。

「この掛け声とも矢声ともつかない高い調子の囃子は、何遍も繰り返されて、海神4人は次から次に立ち現れて弓に矢をつがえて籠を射る。こうして最後の海神の矢が猪の代わりの籠に突き刺さると、1人の男が四つん這いになって猟犬のまねをして現れ、籠に噛みつく真似をする。又他にも2～3人の男が現れて籠に噛みつくやら、遂には籠を持ち去るのである」（稲村1968）。

この「猪狩りの儀礼」〔の次の造船と航海の儀礼〕が済むと、根神たちは神アシャギに引き揚げて、派手な狩猟の衣装を普通の白麻の神衣装に着替え、持ち物をすべて風呂敷包にして、次の根神たちの集合場所である字奥間の神アシャギに出発するのである。

### ③ 猪狩りの神歌

稲村は、猪狩りの儀礼で「神遊び儀礼の神歌」がくり返し歌われていることに対し、疑問を感じ、その訳を神役たずねている。「猪狩りのキューナを覚えている人がいないの、玉ガーラの歌を代用している」との話が記録されている。そして、久志村の祭りに猪狩りのオモイという神歌が歌い継がれていることを聞き出している。その神歌は「山のウムイ」（シンマ神ウムイとも称する）で、久志村字辺野古の根神・島袋カマドさんの記録と字久志の根神・久場直子さんの記録より採録したと述べている。

#### 山のウムイ（シンマ神ウムイ）

歌の言葉	大意及び言葉の解釈
1. ムカシヌエイ、ホーコマ	昔の、ホーコマ以下は囃子
2. アタルコトエイ	あった事、エイは囃子で全部に付く
3. シタルコト	為した事
4. コンデンチ	不明
5. サスヌルト	根神（巫女）の名
6. ビマヌルト	根神の名称
7. ダシチャマユミ	強靱な弓を
8. クワギマユミ	桑木で弓を
9. クヌミヨーチ	作ること
10. タクミヨーチ	巧みに作ること
11. ヤククヌト	家9軒10軒
12. イヌツレテ	犬つれて猟に行くこと
13. シバタマイ	不明
14. フティジシヤ	太った猪
15. ハヨガマニ	陥穴、シシ落し 落し穴
16. ウイクミテ	追い込めて
17. ヌキクルチ	射て殺し
18. サシクルチ	刺し殺し
19. アカチタラチ	赤血滴す

20. クルチタラチ	黒血滴す
21. ウサギテ	差し上げる
22. シンマガミ	島始神
ホーコマ ホーコマ ホーコマ	囃子

「山のウムイ」が伝える古い時代の狩猟の様子を、箇条書きにしてまとめてみた。( )内の数字は、歌詞の番号である。以下8つの場面が、猪狩りで展開されている。

- ① 猪捕りの弓は桑木で作ったこと (8. 9. 10)
- ② 部落民総出で勢子役を務めたこと (11)
- ③ 犬を使って猟をしたこと (12)
- ④ 猪狩りの罠は陥穴、落とし穴(シン落とし)であること (15)
- ⑤ 勢子役が猪を落とし穴(陥穴)に追い込んだこと (16)
- ⑥ 落とし穴に落ちた猪に弓矢を射いたこと (17)
- ⑦ 暴れなくなった猪を槍で仕留めたこと (18)
- ⑧ 猪を料理して島始神(創生神)に捧げたこと (19、20、21、22)

比地のウンジャミ祭で忘れられた「猪狩りの神歌」が、お隣の集落・旧久志村では歌い継がれていたのである。上記のように「山のウムイ」には、猪狩りの8つの場面が単純明快に謡われている。この神歌に猪狩りの姿が残されており、昔の狩猟の復元を可能にするものである。

この旧久志村の貴重な「山のウムイ」の存在について、疑問視する意見もある。「『諸間切のろくもいのおもり』以来そうしたクエーナは確認されていない」(『名護市史叢書15』(1997年295頁))

稲村(1968)は、『おもしろさうし』研究の先駆けとなった田島利三郎が、猪狩りの神歌「山のウムイ」を採録したことをつきとめ、琉球大学付属図書館の伊波文庫本から田島の「諸間切のろくもいのおもり」を探し当てたと述べている。「シンマガミオモイ」(島始神のオモロ)である。この神歌を田島が採録した時期は、明治28年である。稲村(1968)が採録した「山のウムイ」と比べてみると、稲村の「11. ヤクヌト」が、田島では「ジャッコクのと」となっている。この言葉の意味を、稲村が根神たちに訊ねたら、家9つ10の意であると答えたと記録している(稲村1968)。また、稲村の「15. ハヨガマ(陥れ穴)」が、田島では「かやウがま」(嘉陽洞窟)となっている。猪料理を差し上げた相手について、稲村は「島始神」となっているが、田島は「しよいもい、まだまもい、おしあげて」と首里の王様となっている。



『名護市史叢書 15』では、「久志村大浦の6月ウマチー神歌」として「やまし（山猪）ぬうむい」が紹介されている。これでは「いぬ つりてい やくくぬつ とうくくぬつ」と謡われている。それを「犬を10頭も引き連れて」と解釈している。稲村が根神から教えてもらった「ヤククヌト」（家9軒10軒）との解釈とは違っている。家とは勢子を意味している。猟犬の役割も無視できないが、狩猟の場面で、勢子より猟犬が多いことは考えられない。したがって、根神が稲村に説明したように、家（動員した農民勢子）9軒10軒との解釈の方が理にかなっているように思える。こうした細部の違いは見られるものの、猪狩りの姿を謡う内容に大きな違いはない。

### 3-4 昔の猪狩りの復元 ー儀礼と神歌からー

猪狩りの儀礼と神歌から、昔の猪狩りの姿を振り返ってみたらどうなるだろうか。まず猪狩りの儀礼で明らかなのは、海神が主役で山神が脇役だということである。海神は獲物を捕らえる役で、狩猟では「捕手」あるいは「牧士」と称される。海神が大柄の派手な狩りの衣装で身をまとい、手に持つ大弓は、紅白の布が巻き付けられ、両端に美しい房をつけて飾ったもの。鉄鏃てつぞくのついた箭や3本を持って猪を射捕る役は、儀礼の花形役でもある。ウンジャミ祭のクライマックスは、海神が演じる猪を仕留める場面との見方もある。

脇役である山神は、鼓を打ち鳴らし、大声ではやし歌を唱って海神を応援するだけである。稲村も述べているように、山神は勢子せし役を担っている。勢子とは、本来百姓・農民の務めである。山のウムイによれば、「ヤククヌト」（家九十）というのは、勢子役として動員された部落の世帯数である。稲村は当時の部落世帯が10軒ではないかとの見方をしているが、部落世帯の9～10割という見方もできる。いずれにしても百姓勢子は、部落民のほとんどが動員されたということを意味している。本土の狩猟の事例からすれば、勢子は猟犬をつれて、2晩3日かけて山林原野を駆けめぐり、獲物の猪を探し当て、その獲物を捕獲場に追い込む役である。だから、人数は多い方がよい。勢子が小太鼓を頭上高く打ち鳴らし、「ハヤシ歌」（ハンニガーラ・ホーエーヤー）大声で歌う演出は、獲物の猪を猟犬とともに探しだし、その獲物を捕り場・捕獲場に追い込むための仕草を意味しているのである。

猪の捕獲場について、猪狩りの歌「山のウムイ」によれば「ハヨガマニ ウイクミテ」と謡っている。「ハヨガマ」とは猪を「陥れる穴」のことで、「落とし穴」のことである。猪や鹿を捕る穴であり、「シシ穴」とも呼ばれている。猪は45kmの早さで猛進し、暴れ回る猛獣である。平場で捕れる動物ではない。猟銃のない時代には、猪を囲い込んで穴に落とし入れ、動きを少しでも押さえなければ、捕らえる事は困難だったからである。

昔の猪狩りについては、国頭村に「犬付屋取伝説」がある。国頭村で当時（第一尚氏時代）、

馬廻役（馬担当役人）の奥間カンジャーが、猟犬をつれて狩人に扮して金丸に食料を届けたという言い伝えである。猪狩りに一人で出かけたということは、猪狩りの罾が仕掛けてあったからであろう。猪の好物のエサを仕掛けておいて、えさ場にきた猪を槍で仕留める取り方や落とし穴による捕獲である（沖縄県博物館・美術館 2015 特別展「イノシシとブタと私たち」）。

大宜味村には、イノシシが農作物を食い荒らさないように畑と山の境界に 31 kmにもおよぶ長さの猪垣（石垣高さ 4 尺～7 尺）〈1.3m～2.3m〉を構築してあった（大宜味村ホームページ）。現在は、その一部 1300mを村指定の史跡として保存している。以前は、この猪垣が崩れた所に落とし穴を掘って、イノシシを捕った記録もある（沖縄県博物館 2015）。

以上のようにウンジャミ祭の猪狩り儀式と神歌、それに沖縄北部の猪狩りの伝承や記録から昔の猪狩りの姿を整理すると、第一は農民・百姓勢子による猪の探索、第二は勢子と猟犬による「落とし穴」「嘉陽洞窟」への追い込み、第三は捕り手（牧士）が「落とし穴」「嘉陽洞窟」に追い込まれた猪を仕留めて捕獲することである。

こうした勢子や牧士・捕り手、獲物の捕り場、落とし穴について詳しく調べるため、本土の古い時代の猪鹿狩りの事例を参考にに取り上げてみたい。

### 3-5 江戸時代の牧の事例

国頭村比地の祭祀にみられるような、地域レベルの猪狩りの事例を、本土の古文書から調べることは難しい。しかし、江戸幕府の将軍の鹿狩りについては、詳細な記録が残されている。この鹿狩りには、猪も含まれている。ここでは、大勢の勢子が動員され、経験豊富な捕り手（牧士）が、捕獲場に追い込まれた獲物を捕らえている。狩猟の規模は大小違いはあるが、狩猟の仕方は基本的に変わらないように思われる。千葉県流山市の青木更吉氏は、古文書をひもときながら、当時の猪鹿狩り、馬捕り場の実態を調査した本を発行している。『小金牧 ー野馬土手は泣いているー』（2001）、『佐倉牧 ー続野馬土手は泣いているー』（2002）、『小金牧を歩く』（2003）、『嶺岡牧を歩く』（2005）、『佐倉牧を歩く』（2007）、『小金原を歩くー将軍鹿狩りと水戸家鷹狩りー』（2010）など6冊である。

#### ①将軍の猪鹿狩りの事例

まず、『小金牧を歩く』（青木 2003）、『小金原を歩く』（青木 2010）で取り上げた狩猟の時期は、1614年から1849年の間の4回である。狩猟の主人公と場所であるが、江戸幕府の初代将軍である徳川家康は1614年、今の千葉県八街市（旧川上村）と佐倉市の原野で鹿狩りをしている。1725年と翌年には、徳川吉宗が千葉県小金牧において鹿狩りしている。徳川

家斉が1795（寛政7）年、家慶が1849（嘉永2）年に千葉県小金牧で鹿狩りをしている。

青木（2010）は、将軍の鹿狩りの目的について「軍事演習であり、将軍の権力誇示である」と述べている。つまり一大イベント、国家的行事であった。そのため、動員された農民勢子や牧士は大多数で、捕り場も臨時に設置した大規模なものであった。

『松戸の歴史案内』によると、1725（享保10）年の鹿狩り計画では人足3千人であったが、本番では農民勢子が1万5千人にふくらんだという。組織的な追い込み方で、1の手から7の手に分けて四方八方から、それも遠方から徐々に2晩3日もかけて追い込む人海作戦であったと青木（2010）は述べている。

将軍鹿狩りで農民勢子たちの持ち物は、役人から指示されており、鹿や猪を追い立てる3.6m竹棒、竹棒をつなぎあわせて柵に仕立てる縄、鳴り物としてのホラ貝や竹笛などのようである。国頭村比地小玉森のウンジャミ祭では、勢子の鳴り物と言えは鼓であり、大声で歌いあげる「はやし歌・キューナ」であった。

牧士たちの活躍については、「小金原御狩之記図絵」1795（寛政7）の記録を青木は紹介し、「牧士といふものはかの原（小金原）を日頃乗廻りて、野馬とる業など熟したるものなり。赤き羽織に駒形付けたるを一様に着なし、猪鹿追う事誠に駿きわざなり。走る鹿を追越て先へまわり、追戻し追廻る手煉見事なりと人みな感じぬ」と記している。

牧士たちは年1回野馬捕りを経験しているので、鹿狩りについても手慣れている。野馬を追うか、猪鹿を追うかの違いだけ。舞台も同じ小金原での追い込みだから勝手も知っている、と述べている（青木2010）。

享保の鹿狩りでは、将軍が高いところに造られた御立場で総指揮をとり観戦した絵図がある。御立場前の右側には500mの麻網が張られ、左側には800mの縄網が張られていた。鹿や猪は追いかけて騎馬によって、この囲いの中に追い込まれてくる。ここが騎射（牧士）の狩場である（青木2010）。

猪鹿と格闘する様子については、『小金野夢物語』を取り上げて「猪鹿獸類騎射方、各弓たずさえ放矢雨よりもはげし。矢を負いて駆け出せば、諸家の殿方我劣らじと騎馬を進め、追い取り込め、一槍突けば猛獸荒立ち勢い余さじと、二槍三槍、あるいは四五突き貫き、ようやく息は絶えたりけり」との記録を紹介している。国頭村比地のウンジャミ祭では、猪狩りの儀礼で、弓矢で射てから槍で猪を仕留めており、狩りの方法は一致している。

その時の指揮官・松平信濃守は、並みいる衆の者どもに、次のように下知したようである。

「獸を追うとき、深入りして怪我するな。遠い獸は射落とせ。近くは突き止めよ」

また、猟犬の様子について、「四本松の方へ猪が跳びだしてくると、1匹の犬が駆けだして猪の尻へ跳びかかり、尻尾に食いついた。なかなか仕留め兼ねていると、もう1匹の犬が

出てきて首へ食いついて、やっと仕留めることができた」（御鹿狩御次第荒増）と記述している。

猪鹿と格闘し、仕留める場面が狩猟の花であるといわれている。青木（2010）は将軍の鹿狩りについて、最後の舞台（時間にしたらおよそ5時間）を指すと述べ、実はその前の追い込みが2晩3日と長く、しかも苦労の連続であって、それら勢子農民の働きは、言わば縁の下の力持ちであったと言えるかと述べている。国頭村比地のウンジャミ祭では、こうした勢子の苦労をうかがい知ることが出来ない。

また、将軍らの出で立ちについて、1725（享保11）年の記録を取り上げ、将軍はビロードの羽織を付け、お供は思い思いに染めた伊達羽織など華やかだが、獲物を捕る役人、牧士などは槍や鉄砲を持った狩りの出で立ちであったと記している。

国頭村比地のウンジャミ祭・猪狩りの儀礼でも、狩りの出で立ちが記録されている。「根神たちは神アシャギに入って白の神衣装から、赤、黄、青等の大柄模様の派手な服装（狩りの衣装）に着替える」（稲村1968）。

## ② 千葉県小金牧のシシ落とし

将軍の鹿狩りは、先に述べたように、その目的が「軍事演習であり、将軍の権力誇示である」から、農民勢子や猪鹿を捕獲する人は数万人にもふくれあがった。獲物を追い込む囲いは将軍の御立場の前に、大規模な囲いがつくられた。

こうした将軍の鹿狩りとは関わりなく、小金牧周辺の農民たちは、鹿や猪によって農作物が食い荒らされるのを防ぐため、猪鹿を捕獲するための罠を仕掛けていた。小金牧の周辺からはシシ落とし、落とし穴が発掘調査で見つかっている。千葉県北西部の小金牧は、江戸幕府直営の大規模な牧場で、庄内牧（野田市）、上野牧（柏市・流山市）、中野牧（松戸市・鎌ヶ谷市・柏市）、下野牧（鎌ヶ谷市・船橋市・習志野市・八千代市・千葉市）、高田台牧（柏市）、印西牧（白井市・印西市）の6牧からなっていた。

千葉県流山市博物館の開館40周年記念企画展「小金牧―絵図・古文書・発掘調査から見た牧と村―」（2018）には、長崎金乗院遺跡のシシ落とし穴が紹介されている。ここは、小金牧の中の高田台牧に位置するところである。シシ穴は江戸初期のもので幅3m、長さ30mの溝の中に、楕円形の落とし穴が連続して14個掘られ、その深さは地表から2mほどである。長崎金乗院遺跡からは、縄文時代の落とし穴も発見されている。この縄文時代の落とし穴は、旧久志村の神歌「山のウミイのハヨガマ（陥穴）」と同じように「陥穴」と記録されている（前掲の流山市博物館、企画展図録）。陥穴の幅は1.5mと小振り、連続していない。獣道にそって、ところどころに掘られたようだ。

1989（平成元）年に発掘された千葉県佐倉市下志津の「神楽場遺跡」からは（下野牧周辺にあたる）、深さ2mもある丸い穴が連続して50個も確認されたと記載されている（青木2010）。『調査報告書』では「猪鹿を追い込んで捕らえた穴であろう」と記され、この落とし穴には「1707年の富士山噴火の火山灰が積もっていたことから、それ以前に掘られたことは明白だ」と記載されている（青木2010）。

千葉県白井市立第一小学校の体育館北側には「根のシシ穴遺跡」（『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書9』千葉県埋蔵文化財センター1989）がある。ここは小金牧のうち中野牧に位置するところである。発掘調査によると、追い込み穴が8m×45m、深さ0.5m。捕込み穴が15m×33m、深さ3～4mという大きさである。鹿狩りのときに勢子・牧士たちが猪鹿を追い込んで捕らえた所だと述べ、このシシ穴の形態について、次のような説明をしている（青木2010）。

「シシ穴は東西に2本の土手を持っていて、それは落とし穴へ落とし込むための誘導路の役目をしていて。誘導路の長さは35mもあり、その先のすり鉢状の窪地にある深い穴へ落とし込む。誘導土手の他に、網も張っていたらしいという話も聞いた。土手と網とで、穴へ誘導したらしい。そうなったら、もう袋のネズミだ。獲物の後ろからは人間や犬がおっただらしい。網の長さは土手よりも長く、1kmにも及んだようだ。おそらく、初めの網は開いていてだんだん狭くなって土手と網になったのだろう」。

鈴木普二男著『白井町の文化誌』の「根のシシ穴」についての論説を、青木（2003）は取り上げて紹介している。「この大規模な遺構については、記録などから判断して少なくとも猪のみを、その捕獲の対象にしたことは誤りで、総じて鹿、猪等農民と何らかの関わりのあった四脚の獣類を捕獲するための遺跡ということが出来る」。

このシシ穴についての鈴木指摘は、極めて貴重で注目すべきだと考える。シシ穴（落とし穴）は獲物を追い込み、捕らえる罠である。罠で大事なことは、追い込みやすい所、入り込んだら逃亡しない所、捕獲しやすい所でなければならない。落とし穴から猪鹿が逃亡しないためには、穴の深さは2mは必要である。「根のシシ穴遺跡」の捕込み穴は、15m×33mの規模で、深さ3～4mとなっている。3～4mの深さからは猪鹿はもちろん、大動物の馬も逃亡することはできない。

青木（2010）も將軍の鹿狩りで見落とすことのできない大事な指摘をしている。それは、次の通りである。

鹿狩りは野馬捕りによく似ている。鹿狩りは中野牧（小金牧には上、中、下の牧あり）を中心にして上野牧や下野牧まで含めて2晩3日の長丁場である。前半の追う部分は馬か鹿の違いはあっても、まったくと言っていい程似ている。が、最期の捕らえるところは、馬は傷

をつけないように捕まえるが、鹿狩りは弓で射ったり槍で突いたりして仕留めるところは違う。

もう一つ、参加する勢子の数が比較できないほど差がある。野馬捕りは1千人程度だが、鹿狩りは7万を超す人数になる（軍事訓練や将軍の権威誇示が目的）。確かに人数は相違するが、馬と鹿の違いはあっても基本的な動きは同じであるから、野馬捕りを大いに参考にして鹿狩りを行ったはずである。（青木 2010『小金原を歩く－将軍鹿狩りと水戸家鷹狩り』44頁）

### ③ 千葉県嶺岡牧の馬捕り事例

鹿狩りは、野馬捕りによく似ているとの指摘を検討してみたい。野馬とは、放牧された馬のことである。牧は土手と堀で囲まれ、野馬が逃げ出して田畑の農作物を食い荒らさないようにした。野馬土手と堀りが大事に保存されている「松ヶ丘野馬土手」を青木更吉氏に案内して頂いた。千葉県流山市と柏市の境界にあり、両市の緑地保全地区に指定されている所である。道路側から見ると土手の高さ3mもある（写真⑤、⑥）。中に入ると掘りが掘られ、その次に1.5mの土手があった。二重土手である。聞くとところによれば、流山市には4重土手もあるという。掘りは3つで土手が4つ、その底幅は30mもあるという。

次に野馬（放牧された馬）を馬捕り場に追い込み、捕獲する様子について、嶺岡牧の事例を調べてみよう（青木 2005）。

「野馬捕りは、人足を多く集めて野馬を追い込む人海作戦である。勢子土手をうまく利用して、前方の逃げ道をふさぎ、背後から取り囲むように追ってのを小さくしていけば馬捕り場へ追い込むことができる。……文化2年、嶺岡各牧の馬捕り人足は、嶺岡・西牧は247人、嶺岡・柱木牧は232人、嶺岡・東牧584人で行われている」。

「勢子たちが、わあーわあーと歓声を上げて野馬を追う。勢子たちに采配を振るのは勢子回してある。野馬を馬捕り場に追い込んだら、捕手が野馬を捕獲する。この役は馬を扱い慣れている人でなければできない。『安房郡誌』には「捕り竿および縄を用いて、駆けていく馬の後方より首に掛けて捕獲す」と出ている。竿の先に輪にした縄をつけてその縄を馬の首にかけて捕らえる。いわゆる「縄かけ」である。首に縄がかかったところで、他の勇敢な捕手が暴れる野馬の前足に飛びついて2本脚に抱きついて馬をどっと倒す。「捕ったり」である。倒れた所を、他の一人が素早く口縄をつけてしまう。この網掛け、捕ったり、口縄つけは、一連の動作で敏速に処理しなければならないので、ともに熟練者が担当した。観客にとっては、手に汗握る緊張の場面である。この捕手役は、明治元年には11人あったと「安房酪農百年誌」に出てい

る。捕手は観衆から注目される野馬捕りの日の花形役者で、選ばれた百姓は鼻が高かったという」（青木 2005）

#### ④ 馬捕り場の地形

##### 丘陵地の牧・嶺岡牧

下総牧（千葉県北部と茨城県南西部）の小金牧は 15～30m の台地にある。佐倉牧は 30～60m の台地に牧は広がっていた。微妙な高低差はあっても、ほとんど平である。これに対して、嶺岡牧は嶺岡山系の山頂や山麓をもふくむ丘陵地にあった。高いところは 200～300m もある（青木 2005）。

下総牧の牧跡は開拓されて畑や住宅地、個工業団地にされたりして、牧跡をとどめない所が多い。一方、嶺岡牧は草原から樹木が茂る山林に変身してしまった。

嶺岡は山でもあるが、丘陵地とも呼ばれる。丘陵地に水田をつくれれば、棚田になるだろう。大山の千枚田は有名であるが、大山に限らず嶺岡山麓では棚田をあちこちで見かける。だから、牧場と棚田は地形的には兄弟と言えよう（青木 2005）。

#### ⑤ 馬捕り場の区画

下総牧（千葉県北部と茨城県南西部）は、どこも広大な台地上にあるから、馬捕り場もだいたい似た形のものである。その中の牧・小金牧の馬捕り場は、千葉県鎌ヶ谷市の「小金中野牧捕込跡」であり、2019 年 6 月、青木更吉先生に案内して頂いた。

この「捕込跡」は、国指定の史跡として保存されている。この史跡の説明板には、馬捕り場の図面も記してある。3つの区画に仕切られており、馬を追い込み捕獲する所が「捕込」、幕府に納める優良馬を繋留する所が「溜込」、牧場に戻す馬を分けて置く所が「分込」と書かれていた。その囲いの大きさは、「捕込」が 40m×60m、「溜込」が 30m×60m、「分込」が 30m×80m の規模である。囲いは高さは、3～4m の丈夫な土手で築かれている（写真⑦）。

鎌ヶ谷市立郷土資料館には、国指定史跡「小金中野牧捕込跡」の模型が展示されていた（写真⑧）。小金牧の中の 1つ・高田台牧の馬捕り場も 3区画の柵形で、広さは捕込 30×50m = 1500 m<sup>2</sup>、溜込 25×30m = 750 m<sup>2</sup>、分込め 25×30m = 750 m<sup>2</sup> と規模は大きい（青木 2001）。

ところが嶺岡牧は、先に触れたように丘陵地にある牧である。この嶺岡牧は、西牧、東牧、柱木牧の 3牧からなっている。馬捕り場は、西牧（山田村）が丘陵の平地につくられ、形は 14×18m 柵形の土手を 3個並べたものと『安房酪農百年史』に記録されている（青木 2005）

柱木牧の馬捕り場は、経塚山山麓の谷間の傾斜地にある。谷間を 20m 位ずつ仕切って、馬捕り場をつくってある、そのしきりには石垣が積まれ、10m×20m の柵型の囲いを、3つ縦

に並べた格好だという。現在の石垣の高さは2 m位で、崩れ跡が見られるようだから、他の牧の馬捕り場から類推して3 mはあったであろう。囲いは下の方が「捕込」、中央が「分込」、上の方が「溜込」だと記されている（青木 2005）。

東牧の馬捕り場は、嶺の平らな所となっているが、囲いの大きさについての記録は見えない。

嶺岡牧の馬捕り場は周辺の地形も異なるので、追い込み方も違った工夫があったのだろう。下総牧より捕り場の規模が小さいのは、牧の規模も小さかったからだろう（青木 2005）。

馬捕り場の囲い土手の高さについて、「『古今佐倉真佐子』には馬三たけと出ている」。江戸時代の馬は体高4尺（121 cm）を定尺とし、それより1寸高いのを「1寸」イッキ、「2寸」ニキと呼んでいた。鎌倉馬の平均が129 cmと推定されるので、「馬3たけ」は387 cmである。これなら土手の高さは4 mあればいいと計算できる（青木 2007）。

千葉県小金牧内の各牧、嶺岡牧の各牧の馬捕り場の囲いの高さが3 mから4 mとなっている実態と『古今佐倉真佐子』の「馬三たけ」は、およそ一致している。

### 3-6 小玉森の堀切と馬捕り場の比較

#### ①小玉森の堀切

青木（2010）の「鹿狩りは野馬捕りによく似ているし、野馬捕りを大いに参考にして鹿（猪）狩りを行った」という指摘と、「根のシシ穴遺跡」の捕込み穴が15m×33m、深さ3～4 mという大きいシシ穴（堀切）は、「農民と何らかの関わりがあった四脚の獣類を捕獲するための穴」という鈴木普二男の指摘である。この青木氏と鈴木氏の指摘は、国頭村比地の猪狩りの捕獲場となる「ハヨガマ」（陥穴）、落とし穴が、どこなのかを示唆している。言うまでもないことだが、比地の神アシャギ前の「遊び庭」での猪捕りは、儀礼であり、実際の捕獲場は別の場所にある。その実際の捕獲場とは、小玉森神アシャギの東側と南側の堀切だと考えられる。

この小玉森の堀切の規模については、稲村が1963年に調査し鳥瞰図を描いている。「鳥瞰図」によれば、東側の堀切は、幅15m×延長80m×深さ4 mである。南側の堀切は、幅4 m×延長60m×深さ4 mである（写真④）。小玉森の堀切は、千葉県白井市「根のシシ穴遺跡」のシシ穴と深さや幅が同じで、掘りの延長が若干違うだけである。

国頭村比地小玉森の「堀切」は、丘陵地に掘られた堀切で、雨が降っても水が溜まるようなことはない。神アシャギの東側の堀切は幅が15mと広く、東の山岳の尾根筋につながって掘られている。南側の堀切は、幅が4 mと狭い。



## ②馬捕り場の形態

牧で放牧された馬を捕らえる場所については、「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」（長濱 2019））で取り上げた。種子島では、馬の捕り場をオロと称し、大きいオロが直径 10m の円形で高さ 1 丈（3 m）で、ここが馬を追い込み囲うところである。小さいオロは、馬を捕まえて焼き印を押し、良い牡馬を選抜したところである。千葉県松戸市小金・上野牧については青木（2003）が『千代田村誌』を取り上げて、「馬を追い込むところを『大込』、馬を捕らえるところを『捕込』と称し、その囲いの高さは 1 丈（3 m）余の土堤にして、添ふるに掘りもあり……あたかも一大城郭の如し」であったと紹介している。この馬を採る土手の絵図は、前掲の拙稿（長濱 2019）に掲載してある。

青木更吉氏の案内で視察した千葉県鎌ヶ谷市の「下総小金中野牧跡」は大規模な「捕込」で、鎌ヶ谷市郷土資料館には、大規模な「捕込」の全体像を表す模型が展示されていた。国指定史跡「下総小金中野牧跡（捕込）」のなかに足を踏み入れて感じたのは、土手による囲いが、城壁のような頑丈な造りだったことである。慶長年間（1596～1615）につくられたものである。土堤によるこの囲いで、中から見上げると堀切の中と変わらない。

小金牧では、1 つの牧に 200 頭以上も放牧していたようで、そのため馬の捕り場の規模が大きい。種子島の牧では、直径 10m と 3 m の大小のオロに馬を追い込んで捕獲する方法であった。頭数が十数頭と少ないからだろう。

それでは、国頭村比地にある小玉森の堀切の形態と、千葉県にあった諸牧の馬捕り場の形態とを比べてみることにする。

表 2 小玉森の堀切と諸牧の馬捕り場の形態

	1 区画	2 区画	3 区画
小玉森の堀切 沖縄国頭村	15m×80m堀切 深さ 4 m	4m×60m 堀切 深さ 4 m	平場 土堤の高さ 3 m
根のシシ穴遺跡 千葉県白井市	15m×33m堀切 深さ 3～4 m		
種子島牧「オロ」 長谷牧	直径10m「追込場」 高さ 3 mの土手	直径 3 m「捕獲場」 高さ 3 mの土手	
小金中野牧 千葉県鎌ヶ谷市	40m×60m「捕込」 高さ3～4m土手	60m×30m「溜込」 高さ3～4m土手	80m×30m「分込」 高さ3～4m土手
嶺岡・西牧 千葉県山田村	10m×10mの柵形 高さ3～3.6m土手	10m×10mの柵形高 さ3～3.6m土手	10m×10mの柵形 高さ3～3.6m土手

資料：稲村（1968）、大山（1960）青木（2010・2005・2003）、鎌ヶ谷市郷土資料館

### ③小玉森の堀切と馬捕り場の共通性

小玉森の堀切は、グスク時代と推定され（長濱 2019）、比較対象として見てきた種子島の牧の原型は、鎌倉から室町時代と推定される。千葉県牧は江戸幕府に入ってからのものであるが、その原型は鎌倉時代の牧の形態を引き継いだものだと考えられる。したがって、牧の規模や扱う道具に変化はあるものの、牧の管理や野馬の取り扱いに大きな変化があったとは考えられない。

まず、「根のシシ穴遺跡」との比較である。第一区画の形が、小玉森の堀切ととても似ている。出典は、千葉県文化財センター編『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 9』（1989）である。2003年にも第二次発掘調査報告書が出ている。8個穴が一行に並んでいる。「発掘調査によると、穴は追い込みが8m×45m、深さ0.5m。捕込は15m×33m、深さは3～4mという大きさで、大規模なものである」（青木 2003）と記載してある。「根のシシ穴遺跡」については、先にも触れたように『白井町の文化誌』で鈴木が「猪、鹿だけでなく四脚の獣類を捕獲するための遺跡」との見方をしており、大動物の可能性を指摘している。

猪や鹿の「シシ落とし」が大動物の捕獲にも使われた可能性があるとの「根のシシ穴遺跡」の事例は、小玉森の堀切の設置目的を考える上で示唆的である。

種子島の牧跡を、筆者は2018年調査した。種子島長谷牧の馬捕り場「オロ」の計測は、大山（1960）が行ったものである。追い込みの囲いと馬を捕まえる囲いが2つ造られている。時代的には中世である。野馬の数は、15頭前後である。種子島の馬捕り場は、大小2区画であり、小玉森の堀切も大小2カ所という点で共通している。

千葉県鎌ヶ谷市の国指定史跡「下総小金中野牧跡（捕込）」は、大規模な構造である。野馬の数は200～250頭も放牧されていたようだ。江戸幕府の牧で、当時の国内の牧を代表するものであろう。囲いが「捕込」、「溜込」、「分込」に分割されていて、江戸時代の馬捕り場として完成された形と言えよう。馬捕り場の機能が3区画で完結されていたのである。

小玉森では、大小2つの堀切と土手で囲まれた平場があった。現在、神アシャギの平場に土手は見えないが、稲村が調査した1963年には、この平場は3mの土塁で囲まれていたと鳥瞰図に記録されている。この小玉森の平場を2つの堀切と合わせてみると、「小金中野牧」の「捕込」、「溜込」、「分込」の機能分担が可能性として考えられる。

嶺岡牧の1つである西牧は、丘陵地の牧として参考になる。傾斜地の囲いを土手ではなく石垣にしている。土手だと風雨に弱いからであろう。小玉森の場合は、堀切による囲いである。丘陵地にある小玉森は、土中に石灰岩がなく、土手よりも堀切が造りやすく、しかも頑丈な囲いとなる。

こうした馬捕り場の状況の共通した第1点は、野馬が追い込みやすく、追い込む馬の数に

相当する広さがあること。第2の共通点は、逃がさないで捕りやすいところ。第3点は、捕った馬を留めておき、引き出していくところが必要だということである。この中の第2の条件、逃亡を防いで捕獲する場所の共通点は、猪鹿では2 m、馬では3 m以上の高さ（深さ）の囲いになっていることである。

以上、比較対象として取り上げた牧は、大規模な「小金中野牧跡」を除けば、囲いの幅、囲いの高さ（深さ）もほぼ共通している。したがって、小玉森の堀切は、猪だけでなく馬の捕り場として使われた可能性が高いと考える。つまり、牧の遺構ではないかと考えられる。

### 3-7 沖縄北部の牧の崩壊

種子島の牧が崩壊したのは、戦後の農地改革である。共有地であった牧を、私有地に切り替え、農民的土地所有制度にしたことが、牧の基盤を崩壊させたのである。沖縄本島の北部では、蔡温の柚山保護政策が、牧を崩壊させた直接的な要因として考えられる（長濱 2019）。山林原野内の牛馬の放牧を、厳しく禁止した蔡温の「山奉行所規模帳」の制度や体制、罰則規定については「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」（長濱 2019）で取り上げた。

ここでは、柚山内の牛馬の放牧禁止令「山奉行所規模帳」の罰則規定について、補足的に述べることにする。柚山内の放牧禁止令とその罰則の重さは、裏返せば沖縄北部の山林に、多くの牛馬牧があったことを裏付けるものでもある。

罰則規定「山奉行所規模帳」（第17項）は次の通りである。

「土手（土塚）内の山に牛、馬、山羊などを放し飼っている者は、罰金 20 貫文を言い渡し、10 貫文は見つけ出した者に渡し、残りの 10 貫文は山の造林費に充てること」（『蔡温と林政八書の世界』（仲間勇栄校注、2017、榕樹書林）。特に国頭地方の各間切では、この禁止令による取り締まり体制が厳しく、3奉行所 1 2 筆者態勢がとられた。

1737 年当時、20 貫文とはどれだけの重みがあるのか。当時は現金を払うわけではないので、現物で賠償しなければならない。お米に換算すると 1 文が 0.125 合だという（山本私信 2019）。20 貫文は 2 万文となる。2 万文×0.125 合=2500 合（2.5 石）である。1 日 2.5 合のお米を食べる世帯があったと計算すれば 1000 日分である。当時の米の反収を記録した資料を見いだせないが、明治の土地整理事業に参考にした資料「地租改正参考書」1896（明治 29）年によれば、沖縄国頭郡の米の反収は 0.813 石のようである。罰則の 2.5 石は、3 反の田圃から収穫量に相当する。当時、農家の耕作地は限られている。罰金 20 貫文を科せば、百姓は完全に破産するのは火をみるより明らかである。そうならないためには、馬を手放すのが当然の姿である。こうして、沖縄北部の牛馬の放牧、すなわち牧は完全に崩壊したのである。

「辺土名西平に馬追い（馬場）が存在したことから、馬の飼育に適しないところではなか

った。馬による林産物の多量搬出は、山の荒廃を招くからだと考えられ、王府時代に国頭間切と大宜味間切は馬の禁止区域とされた。」（『国頭村誌 2016』）。つまり、馬の放牧禁止令が馬の飼育禁止区域と受け取られたのである。残されたのは、牧を管理していた血縁地縁の住む部落に付けられたマキョ（マク・マキ）名だけとなったと考えられる。

現代になっても古代部落をマクと称し、又は称された所は、国頭村の大部分の集落であり、大宜味村の塩屋も「シュヤマク」と呼ばれていた。また、久志村辺野古は「小湊<sup>こいなと</sup>コダガマ」と呼ばれていた（稲村 1968）。この地域（羽地・大宜味・久志・国頭 4 県に少々美材有るのみ『球陽』1735）は、首里王府の高級木材供給地として重視されたことから、蔡温の『山奉行所規模帳』による杣山保護政策が優先され、牛馬の杣山放牧が厳しく禁止された所である。牧が廃止されても、牧の名残として神歌や部落名にマクが残され、その歴史を伝えている。

## 要約

①『おもろさうし』には「まきよ」という言葉を使った神歌が 7 例ある。「まきよ」について、原本には「牧也」と注釈が付けられている。ところが、現代の『おもろさうし』研究者は、「まきよ」を「血縁及び血縁部落」と解釈している。

「まきよ」は、マキ・牧を指す言葉であり、牧を管理していた血族とその部落も意味するようになり、牧跡を示す地名になったと考えられる。

②琉球から明国に贈られた貢馬の最盛期は、三山時代である。三山時代の貢馬には、倭寇の深い関わりがうかがわれる。大量の貢馬の調達や船舶輸送は、在地勢力だけでは困難である。三山王は、倭寇と提携して馬の産地として牧をつくりあげ、生産された牧を馬の按司屋敷の馬場で調教し、馬場で優良馬を選抜して明国への貢馬を調達したと考えられる。馬の産地を区分するために、〇〇マキという名がつけられ、マキョやマクと訛ったものと考えられる。

③国頭村比地の小玉森は、「まつがまマク」とも呼ばれた古い部落跡である。この小玉森にはウンジャミという祭祀があり、その中に「猪狩りの儀礼」がある。この儀礼は、昔の猪狩りの再現と考えられるが、実際の狩りでは、猪を追い込み落とし入れる穴が必要である。この落とし穴（捕獲場）としては、小玉森の堀切が考えられる。この堀切は、規模からみて猪狩りの捕獲場だけでなく、牧馬を捕らえる「捕込」として使われた可能性が高い。

小玉森の堀切は牧の遺構であり、「まつがまマク」は牧跡の名残と考えられる。

## 謝辞

法政大学の福寛美先生からは、『おもろさうし』の「まきよ」の用例を取り上げて頂き、ご教示を賜った。福先生の共著『琉球王国と倭寇』、『琉球王国誕生』からは多くの示唆を得た。千葉県流山市の青木更吉先生からは、先生の著書『小金牧を歩く』、『嶺岡牧を歩く』、『佐倉牧を歩く』など6冊の大作をご恵送賜った。また、青木更吉先生と石井義宣先生には、千葉県流山市立博物館、流山市の「松ヶ丘野馬土手」、千葉県鎌ヶ谷市の「国指定史跡・下総小金中野牧跡の捕込」、鎌ヶ谷市郷土資料館を案内して頂き、馬牧と捕込に関する親切丁寧なご教示を賜った。沖縄県立博物館・美術館の主任学芸員・山本正昭氏には、18世紀初期の貨幣価値についてご教示賜った。国頭村教育委員会の学芸員・赤嶺信哉氏からは、国頭村比地のウンジャミの資料を賜った。元校長の伊計徳善氏と元教諭の諸見和代さんには、国頭村比地のウンジャミを案内頂いた。宮古島市総合博物館の学芸係・新田由佳さんには写真の貼り付けと校正に協力して頂いた。記してお礼申し上げます。

## 参考文献（五十音順）

- 青木更吉 2001 『野馬土手は泣いている－小金牧－』 崙書房出版  
青木更吉 2002 『続 野馬土手は泣いている－佐倉牧－』 崙書房出版  
青木更吉 2003 『小金牧を歩く』 崙書房出版  
青木更吉 2005 『嶺岡牧を歩く』 崙書房出版  
青木更吉 2007 『佐倉牧を歩く』 崙書房出版  
青木更吉 2010 『小金原を歩く』－将軍鹿狩りと水戸家鷹狩り－ 崙書房出版  
池谷望子 2011 「琉球の国際貿易の開始」 『南島史学』 31-78 頁  
池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2005 『朝鮮王朝実録琉球史料集成【訳注篇】』 榕樹書林  
稲村賢敷 1968 『沖縄の古代部落マキョの研究』 吉川弘文館  
伊波普猷 1940 「琉球国由来記解説」 『伊波普猷全集』 第7巻 平凡社 425-427  
大宜味村 1978 『大宜味村史』 資料編  
大宜味村役場 2019 「大宜味村ホームページ」  
大林太良 1995 『北の神々 南の英雄』 小学館  
大山彦一 1960 『南西諸島の家族制度の研究』 関書院  
沖縄古語大辞典編集委員会 1995 『沖縄古語大辞典』 角川書店  
沖縄県農林水産部編 『戦前期の沖縄農地制度資料（沖縄県土地整理事業関係）』 113-161  
鎌ヶ谷市教育委員会 『鎌ヶ谷市郷土資料館あんない』

- 金日宇・文素然 2015『韓国・済州島と遊牧騎馬文化』明石書店
- 国頭村役場 2016『国頭村史くんじゃん』村政施行百周年記念
- 佐伯弘次 2006「前期倭寇の活動から平和な通交関係へ」佐伯弘次編『老岐・対馬と松浦半島』吉川弘文館 97
- 島村幸一 2010『おもろさうしと琉球文学』笠間書院
- 田中健夫 1987「倭寇と東アジア通交圏」『日本社会史第一巻 列島内外の交通と社会』岩波書店 146-158
- 千葉県流山市立博物館 2018『開館 40 周年記念企画展』「小金牧一絵図・古文書・発掘調査から見る牧と村一」
- 陳侃（訳注原田禹雄）1995『使琉球録』榕樹社 210
- 知花博康 1982「村内におけるシヌグ及びウンジャミの分布」『国頭村文化財調査報告書』第 1 集』国頭村教育委員会 57-65
- 林田重幸 1978『日本在来馬の系統に関する研究』日本中央競馬会
- 細井浩志 2006「老岐・対馬・松浦の歴史」佐伯弘次編『老岐・対馬と松浦半島』吉川弘文館 72
- 仲原善忠・外間守善 1965『校本おもろさうし』角川書店
- 名護市教育委員会 1997『名護市史叢書 15』一やんばるの祭りと神歌一
- 長濱幸男 2012「宮古馬のルーツを探る」『宮古島市総合博物館紀要』第 16 号 1-23
- 長濱幸男 2013「宮古馬のルーツを探る（続）」『宮古島市総合博物館紀要』第 17 号 16-39
- 長濱幸男 2014「宮古馬のルーツを探る（3）」『宮古島市総合博物館紀要』第 18 号 36-71
- 長濱幸男 2019「宮古島の牧と沖縄北部のマキ」『宮古島市総合博物館紀要』第 23 号 43-88
- 仲松弥秀 1968『神と村』琉球大学沖縄文化研究所
- 仲松弥秀 1975「沖縄のマキヨ村落」一仲松弥秀先生退官記念講演会一南島地名研究センター編 2005『南島の地名』ボーダインク 40-53
- 仲間勇栄 2017『蔡温と林政八書の世界』榕樹書林
- 野澤謙・庄武孝儀 1981『日本在来馬の遺伝子構成とそれに基づく類型化の可能性について』日本馬事協会
- 藤田祐樹 2015『イノシシとブタと私たち』2014 年度博物館企画展
- 外間守善・波照間永吉 2002『定本おもろさうし』角川書店
- 外間守善・波照間永吉 1997『定本 琉球国由来記』角川書店
- 外間守善校注 2000『おもろさうし』（上・下）岩波書店
- 吉成直樹・福寛美 2006『琉球王国と倭寇』森話社

- 吉成直樹・福寛美 2007 『琉球王国誕生』 森話社
- 吉成直樹 2015 『琉球史を問い直す』 森話社
- 李薫 2011 「人的交流を通じてみる朝鮮・琉球関係―被虜人・漂着民を中心に―河宇鳳・孫承喆・李薫他『朝鮮と琉球』榕樹書林 120-123 頁
- 和田久徳 訳注 1994 『歴代宝案 訳注本』 第1冊 沖縄県教育委員会
- 和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子訳注 2001 『明実録の琉球史料 1-3』 沖縄文化振興会





写真1. 比地のウンジャミの供物 2019.8.18



写真2. 比地のウンジャミの猪狩り儀礼  
2019.8.18



写真3. 猪の代わり 2019.8.18



写真4. 小玉森の堀切 2019.8.18





写真7. 鎌ヶ谷市「小金中の牧場跡」2019.6.8



写真8. 「小金中の牧場跡」の模型 2019.6.8

千葉県鎌ヶ谷市郷土資料館提供



写真5. 流山市「松ヶ丘野馬土手」2019.6.8



写真6. 「松ヶ丘野馬土手」の看板 2019.6.8

